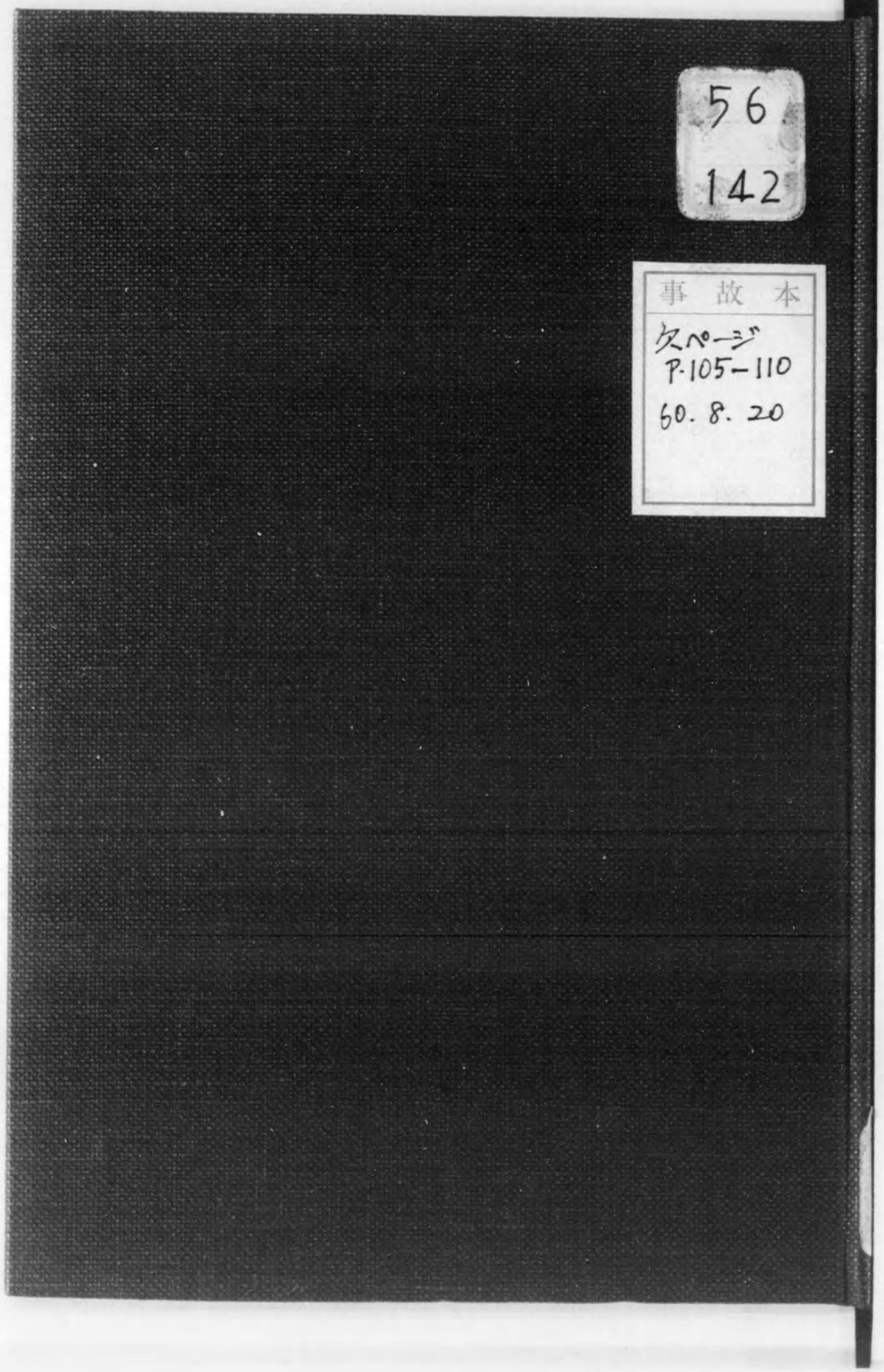

56
142
事故本
欠ページ
P.105-110
60.8.20

始

1-81

東京醫學士 助佐久間醫女學校校長
著纂信兼

產婆學教科書

第一卷

解剖と生理

附 數學と消毒法

產婆用

56-142

はしがき

産婆學は醫學殊に産科學中の一部分と見てもよい、從つて其教科書を作るに當り人々其取るべき範圍を異にするを以て、或る一の教科書丈けにて學習したるものは、其書物にかき部分の政府試驗問題に接したる時に答ふる事が出來ない。然るに本書及獨習説明書は各地方の最近試驗問題を參照して政府試驗に應じ得らるゝに便宜に編纂してある。尤も普通の試驗答案集と

大正
7. 7. 2
内交

はしがき

は異り試驗問題に出でざりし部分も産婆に必要と認めたる點は悉くこれを網羅し、而も産婆として常に心得可き肝要の範圍と信じたる部分は之を教科書中に載せ、主として受驗の爲めに知るを便とする部分は獨習書中に加へ、以て兩者の區別を判然せしめたのである。之により讀者をして啻に受驗的學習のみに終らしめず、旁々以て産婆學の眞髓をも理解せしめ得ば幸である。

大正七年夏

佐久間兼信識

産婆學教科書第一卷（豫備編）目次

（洋數字は獨習說明書頁數）

緒論 …… 1……(2)

第一章 産婆の職責 …… 1……(2)

第二章 産婆學の內容 …… 1……(4)

第一編 産婆に必要なる數學

第一章 温度 …… 2……(6)

第二章 尺度 …… 八……(13)

第三章 重量 …… 10……(15)

第四章 液量 …… 11……(19)

第五章 「プロセント」及「プロミルレ」 …… 11……(20)

第二編 解剖學及生理學

甲部 人體外部の名稱

目次

第一章 頭首……(27)
第二章 頸部……(27)
第三章 軀幹……(27)
第四章 四肢……(27)

乙部 人體の諸組織

(甲) 硬組織
第一章 骨……(32)
第一節 頭骨……(32)
(甲) 頭蓋骨……(32)
(乙) 顔面骨……(32)
第二節 軀幹骨……(32)
(甲) 脊柱……(32)
(乙) 胸廓……(32)
(丙) 骨盤……(34)

目次

一 骨盤の各骨
(薦骨……(34)
(尾骶骨……(34)
(髂骨……(34)
二 骨盤の關節及靱帶……(34)
三 大骨盤と小骨盤……(37)
(甲) 大骨盤……(38)
大骨盤壁 大骨盤測定
(乙) 小骨盤……(39)
骨盤入口、骨盤腔、骨盤出口、骨盤壁、骨盤傾斜、骨盤軸、骨盤男女の差異、骨盤内臓器、

第三節 四肢骨……(43)
第二章 軟骨……(44)
第三章 齒牙……(44)
(乙) 軟組織
第一章 皮膚……(48)
第二章 粘膜……(49)

第三章　漿膜……五九…(49)
第四章　結締織……五九…(49)
第五章　脂肪組織……六〇…(50)
第六章　筋肉……六〇…(50)
第七章　循環器……六三…(53)
第一節　血管系……六三…(53)
一心臟　二血管　三血液　四血液循環
五心臟搏動及脈搏
第二節　淋巴管系……七五…(57)
一淋巴管　二淋巴液　三淋巴腺
第八章　神經系……七七…(58)
第九章　內臟……七九…(54)
第一節　呼吸器……八〇…(54)
第二節　消化器……八六…(57)
第三節　泌尿器……九八…(75)

第四節　生殖器……一〇三…(78)
男性生殖器……一〇三…(78)
女性生殖器……一〇五…(81)
甲　外生殖器
一乳房……一〇五…(81)
二外陰部……一〇九…(82)
乙　內生殖器
一膣……一一〇…(84)
二子宮……一一一…(84)
三輸卵管……一一七…(88)
四卵巢……一二〇…(89)
生殖器の生理
第一　月經……一二一…(96)
第二　排卵……一二五…(106)
第三　受胎……一三五…(103)
第五節　血管腺……一三八…(112)

第三編　消毒法

第一章　細菌……一三〇…(119)
第二章　消毒の必要なる理由……一三一…(120)

目次

第三章　制腐法と防腐法……（121）
第四章　消毒法の種類……（122）
第五章　消毒藥……（123）
第一節　消毒藥の種類……（123）
第二節　消毒藥の用法……（125）
第六章　消毒の方法……（132）
第一節　手指及皮膚の消毒法……（132）
第二節　外陰部の消毒法……（135）
第三節　器械の消毒法……（139）
第四節　繃帶材料の消毒法……（143）
第五節　衣類の消毒法……（145）

課外講義（獨習記明書）

半陰陽……（91）
月經……（96）

緒論

第一章　産婆の職責

産婆の職責は次の如し。

産婆の職責は『母兒二名の健康と生命』に關す、故に極めて重大なるものなり。

第二章　産婆學の内容

産婆學として學ぶ可き事柄は次の如し。

- 豫備編
  - 産婆に必要なる數學
  - 解剖學及生理學
  - 消毒法
- 本編
  - 正規
    - 妊娠
    - 分娩
    - 産褥
  - 異常
    - 妊娠
    - 分娩
    - 産褥
- 補足編
  - 産婆に必要なる看護法及介助法。
  - 器械及繃帶の名稱及使用法。
  - 産婆に關する法令。
  - 産婆の資格及心得。

の狀態・診察・處置

の狀態・診斷・處置

但し、妊娠は妊婦に關し、分娩は産婦に關し産褥は褥婦及初生兒の兩者に關す。

豫備編

第壹編　産婆に必要なる數學

第一章　溫度

一、檢溫器の種類。

溫度を計るには、檢溫器を用ふ。産婆の使用する檢溫器に次の三種あり。

檢溫器
- (一)體溫計……妊婦、産婦、褥婦、嬰兒等の體溫を計る。
- (二)浴湯檢溫器……浴湯の溫度を計る。
- (三)寒暖計……産室等の氣溫を計る。

二、檢溫器度盛の種類。

檢溫器を、其度盛の方法により、次の三種に分つ。

檢溫器
- 列氏(レオミュール氏)……(獨逸等にて俗間に用ふ)
- 攝氏(セルジウス氏)……(體溫を計るに用ふ／單に何度と云ふは攝氏と知るべし)
- 華氏(ファーレンハイト氏)……(我邦にて氣溫に用ふ／英・米にては體溫にも用ふ)

三、氷點と沸騰點。

氷點(水の氷結する溫度)三氏共同一

(列氏は　〇　度／攝氏は　〇　度／華氏は三十二度)　とす。

第壹圖　浴湯檢溫器

沸騰點（水の沸騰する溫度）三氏共同一

氷點と沸騰點との間を　列氏は　八〇等分し　攝氏は一〇〇等分し　華氏は一八〇等分し　其各を一度とす

即ち華氏沸騰點は氷點以上は一八〇度なれど、〇度以上は

180 + 32 = 212　二一二度となる。

四、三氏檢溫器度數換算法。

第貳圖　三氏度目の檢溫器

三氏檢溫器の度數を換算するには、

以上　列 80 ∶ 100 ∶ 180 華　即ち　列 4 ∶ 5 ∶ 9 華　の割合を以て比例を立つ可し。

第一表

三氏檢溫器度數換算公式	列氏より	攝 = 列 × 5/4 華 = 列 × 9/4 + 32
	攝氏より	列 = 攝 × 4/5 華 = 攝 × 9/5 + 32
	華氏より	列 = (華 − 32) × 4/9 攝 = (華 − 32) × 5/9

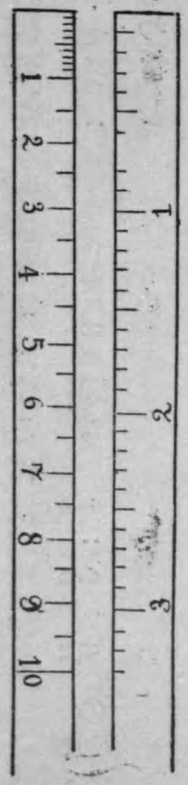
但し列氏又は攝氏より華氏を算出したる時は其數字は華氏

氷點以上の度數なるを以て、これに三十二度を加へて其の度數となす可し。

又華氏より他の二氏を算出するには其比較に先き立ち、〇度以上の數字を先づ氷點以上の數字に改むべし（即ち三十二度を減ずべし。）

第二章　尺度

本邦にては……曲尺｝を用ふ。
萬國共通は……「メートル」



第參圖　曲尺及「メートル」尺

ミリメートル（粍）（密米）……三厘三毛
セチンメートル（糎）（仙米）……三分三厘
デシメートル（粉）……三寸三分
メートル（米）……**三尺三寸**
デカメートル（粁）……三丈三尺
ヘクトメートル（粨）……三十三丈
キロメートル（粁）（基米）……三百三十丈
一米＝地球子午線の四千萬分の一

第二表

米 × 3.3 ＝ 尺	
尺 / 3.3 ＝ 米	

第三章　重量

本邦にては……貫匁　萬國共通は……「グラム」　を用ふ

ミリグラム（毫）（密瓦）……〇、〇〇〇二六六餘
センチグラム（氂）（仙瓦）……〇、〇〇二六六餘
デシグラム（毫）……〇、〇二六六餘
グラム（瓦）……〇、二六六餘
デカグラム（砝）……二、六六餘
ヘクトグラム（廛）……二六、六餘
キログラム（砝）（基瓦）……二六六、餘
一瓦＝攝氏四度の蒸溜水一立方仙米の重量

第三表

分と瓦の換算
分 × 3/8 = 瓦
瓦 × 8/3 = 分

第四表

我邦慣用藥量		
一磅（ポンド）	四五〇瓦（百二十匁）	
一弓（オンス）	二五瓦	
一匁（ダラム）	三、五瓦	

第五表

藥液一瓦の滴數		
水類……十六滴	油類……二十滴	酒精類……廿五滴

第六表

大暑量	
一小刀尖……一、〇瓦	
一刀尖……二、〇	
一茶匙……四、〇	
一小兒匙……八、〇	
一食匙……一五、〇	

第四章　液量

我國にては……石・斗・升・合・勺
萬國共通は……立（又は立方仙米）を用ふ

一立＝千立方仙米＝五、五四四餘

第五章　「プロセント」と「フロミルレ」

（一）%とは、全量百に對し何程なるやを示す。

例。二%石炭酸水は　石炭酸　二分
　　水　九八分

第七表

100/倍數 ＝ %數	百を除す何れも常に
100/%數 ＝ 倍數	

（二）‰とは、全量千に對し何程なるやを示す。

例。一‰昇汞水は　昇汞　一分
　　水　九九九分

第貳編　解剖學及生理學

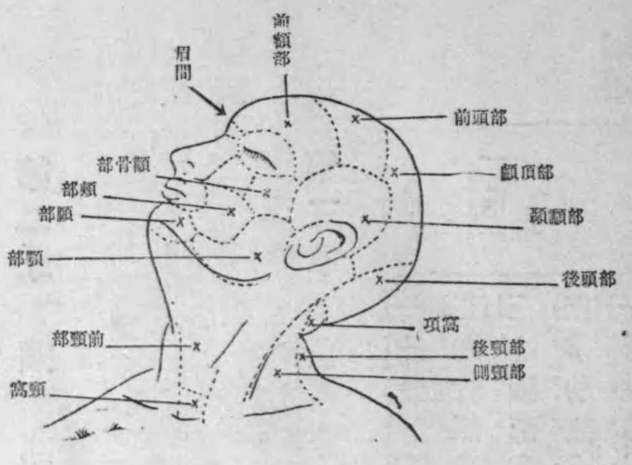
甲部　人體外部の名稱

第一章　頭　首

甲、頭蓋（頭部）（毛髮の生ずる處）

一　前頭（額の毛生際より一手掌幅の間）
二　顱頂（頭蓋の中央、卽前頭より後方一手掌幅）
三　後頭（更に其後方骨の小突起迄、卽毛髮の盡くる部の稱）
四　顳顬（頭蓋の兩側、耳の前上後方）

第四圖　頭首及項頸



乙、顏面

一　前額部（額）
二　眉間（眉の間）
三　顴部（顴骨の部）
四　頬部（頬の部）
五　顎部（嚙む時動く骨の部）
六　顋部（顎の先端）
七　耳部
八　眼部
九　鼻部
十　口部

第二章　頸部（頭首と軀幹との間）

(甲) 前頸　附頸窩（前頸下部の凹陷）
(乙) 後頸（項）　附項窩（後頸の上部毛髮ありて凹陷せる所）
(丙) 側頸

第三章　軀幹（胴）

(甲) 胸廓
一 前胸（胸）
(一) 胸骨部（胸の中央にて頸窩と心窩との間の細長き部）
(二) 肋骨部（胸骨部の兩側肋骨のある部）
(三) 心臟部（左乳頭と胸骨部との間にて第三肋骨より第五肋骨迄）
(四) 季肋部（肋骨部の最下部を云ふ）
(一) 脊柱部（中央脊柱のある部）

二 背部
(二) 肩胛部（脊柱部上方の兩側）
(三) 肩胛間部（脊柱部と肩胛部との間）
(四) 肩胛上部（肩胛部の上方）
(五) 肩胛下部（肩胛部の下方）

三 側胸部（脇）

(乙) 腹部
一 腹部（前腹）
(一) 上腹部　上腹上部の三角形凹處を「心窩部」又は「胃部」と云ふ
(二) 中腹部又は臍部（臍の附近）
(三) 下腹部又は小腹部
(四) 季肋下部（上腹の左右）
(五) 側腹部（中腹の左右）
(六) 腸窩部（下腹の左右）　附 鼠蹊部（腹部と大腿部との間）
（腸骨部）

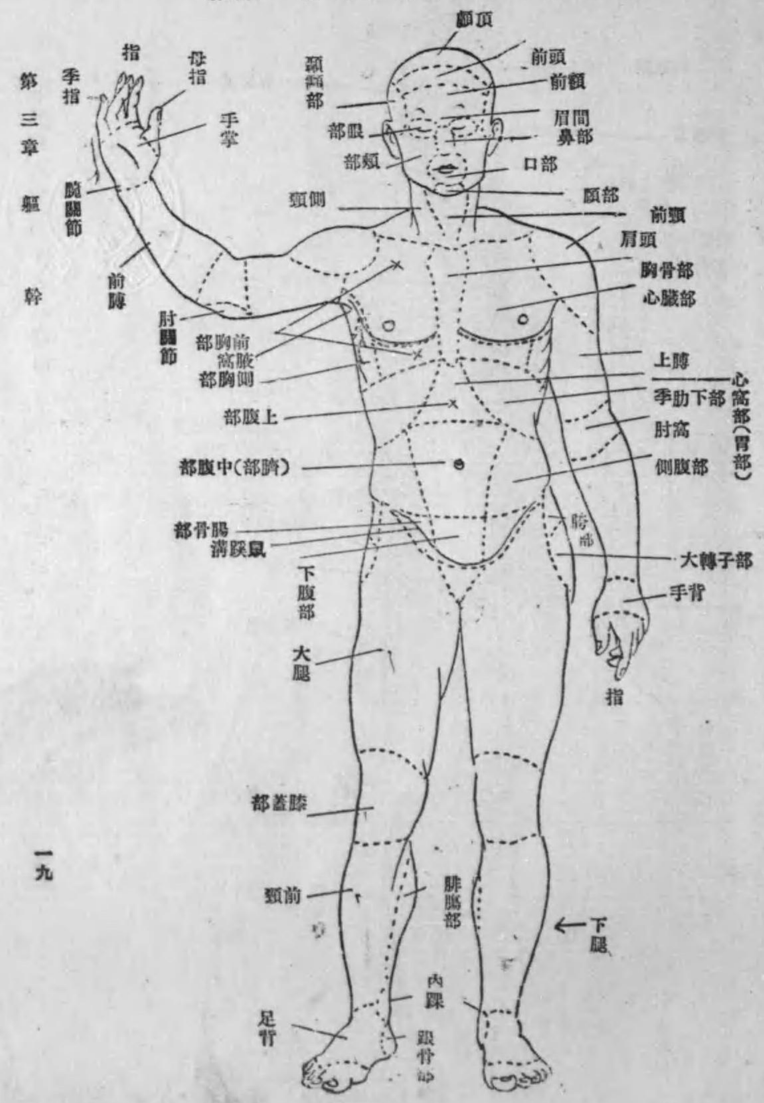
二腰部（腹部の後面）

- (一) 腰椎部（腰部の中央）
- (二) 腰側（腰椎部の兩側）
- (三) 薦骨部（腰椎部下方）……
- (四) 臀部（薦骨部の兩側多肉の部）……
- (五) 會陰部（肛門と陰部との間）……
- (六) 轉子部（兩側にて骨の突隆する所）……
- (七) 跨部（轉子部の上方）……

腸窩部（腹部の(六)）……

骨盤部

第五圖　人體外部の名稱（前面）



第四章　四肢

(甲)　上肢

一、上肢(肩胛關節により軀幹に連る)

二、肩頭(肩の丸き所)

三、手

前膊(肘關節によりて上膊に連る)　腕窩

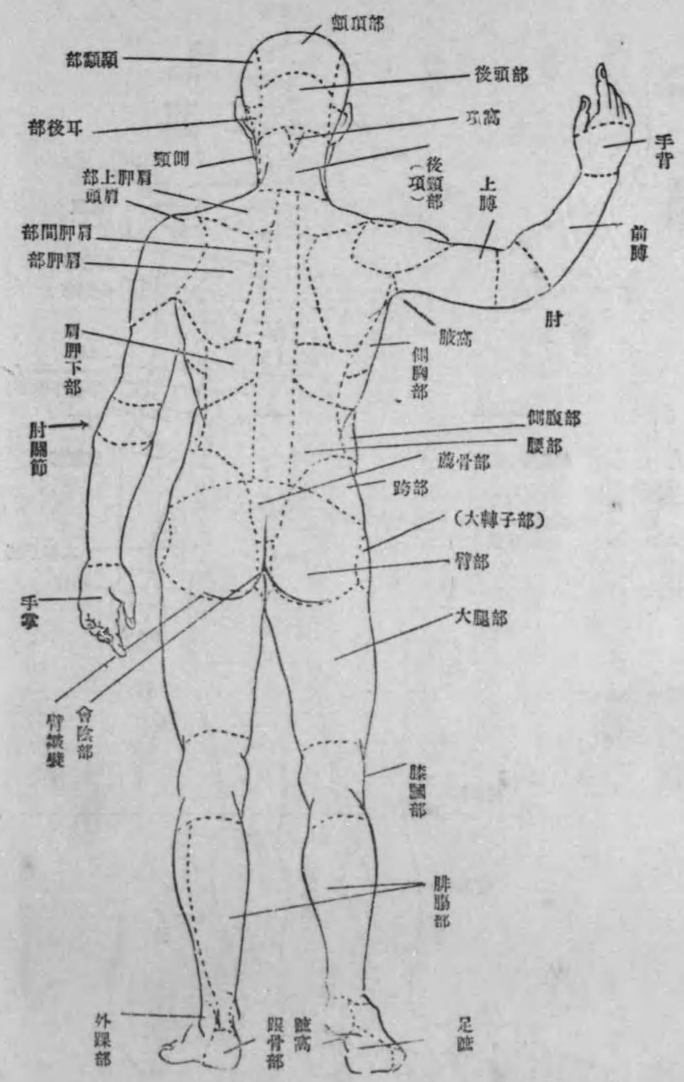
(一)手背

(二)手掌

(三)指

1. 拇指
2. 示指
3. 中指
4. 食指(環指一名無名指)
5. 小指(季指)

第六圖　人體外部の名稱(背面)



（乙）下肢

一、大腿（跨關節により骨盤に連る）

二、下腿（膝關節により大腿に連る）

膝蓋部

膝窩部（膝關節の後面の陷凹）

前脛部　腓腸部

內踝及外踝

三、足

（一）足背

（二）足蹠　附蹠窩

（三）跟骨部

（四）趾

1. 第一趾（蹈趾）
2. 第二趾　3. 第三趾　4. 第四趾
5. 第五趾（季趾）

乙部　人體の諸組織

（甲）硬組織

骨、軟骨、齒牙、

（乙）軟組織

皮膚、結締織、血管、內臟、粘膜、漿膜、脂肪組織、筋肉、淋巴管、神經、

（丙）液體組織

淋巴液　血液　腦脊髓液　分泌液（粘液、漿液、乳汁、消化液、淚液）　排泄液（尿、汗）

(甲)、硬組織

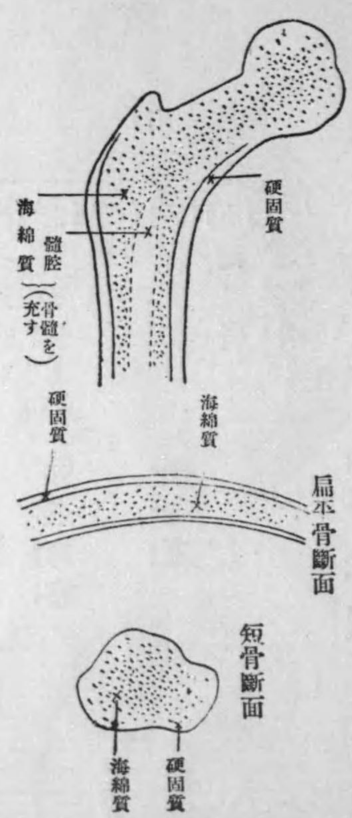
第壹章　骨

(一)骨骼。各骨相聯りたるを骨骼と云ふ、骨骼は身體の軟部を支ふる作用をなす。

(二)形狀による區別
- 長骨〔管狀骨〕……四肢等の細長き骨
- 短骨……手腕・足跗等の短小の骨
- 扁平骨……頭蓋等の扁平の骨

(三)斷面　第七圖の如し。

第七圖



第壹節　頭　骨　22

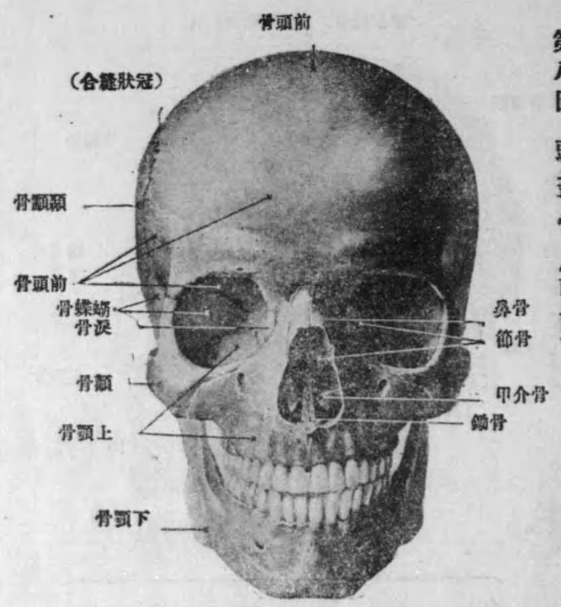
(甲)　頭蓋骨　8

頭蓋穹窿
- (一)　頭頂骨　2
- (二)　前頭骨　1
- (三)　後頭骨　1

頭蓋底
- (四)　顳顬骨　2
- (五)　篩　骨　1
- (六)　蝴蝶骨　1

附
- (1)　頭蓋腔（腦髓を容る處）
- (2)　大後頭孔（後頭骨下面にあり）
- (3)　頭蓋底等の無數の小孔（血管神經等を通ず）

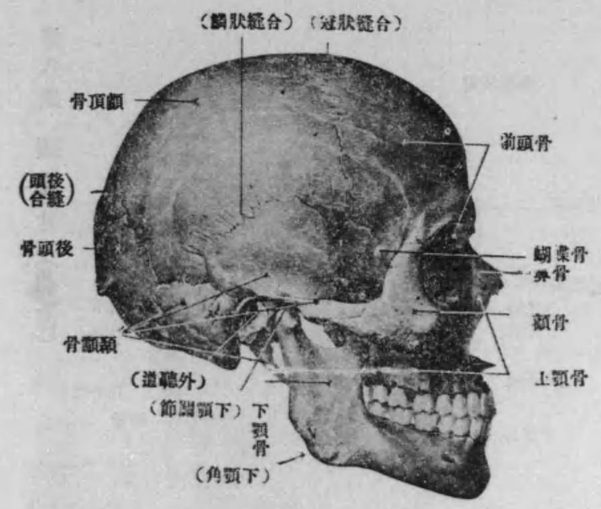
第八圖　頭蓋骨（前面）



(乙)　顏面骨　14

- (一)　顴　骨　2
- (二)　上顎骨　2
- (三)　下顎骨　1
- (四)　鼻　骨　2
- (五)　涙　骨　2
- (六)　甲介骨　2
- (七)　口蓋骨　2
- (八)　鋤　骨　1

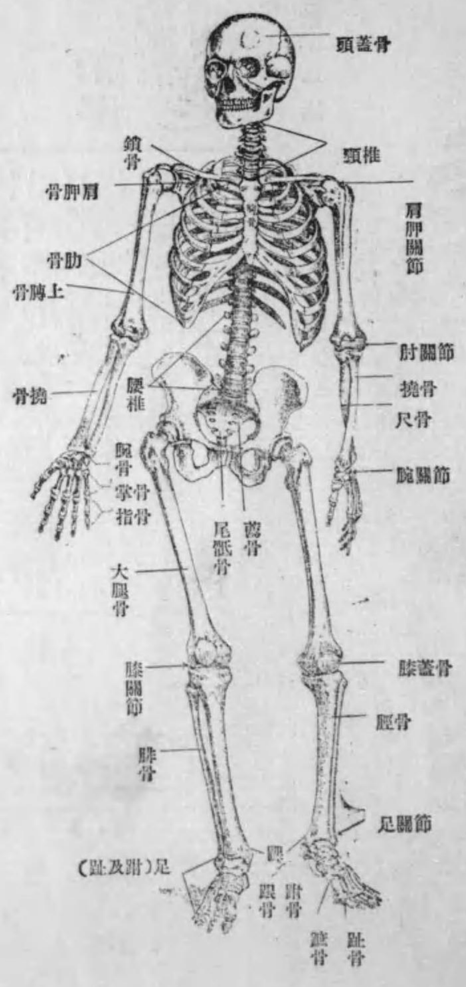
第九圖　頭蓋骨（側面）



附

(1) 齒槽突起（上顎下顎の齒を生ずる部）
(2) 上顎竇（一名ハイモル氏竇）
(3) 下顎關節
(4) 眼窩（眼球を容る所）
(5) 鼻窩
(6) 口腔

第十圖　骨骼（前面）



第貳節　軀幹骨　57

(甲)

脊柱（脊椎骨26個の集合）

- (一)頸椎……7
- (二)胸椎（背椎）……12
- (三)腰椎……5
- (四)薦骨……1（5）
- (五)尾骶骨（尾閭骨）……1（4）

眞椎24

假椎2

脊椎骨26

第十一圖　脊柱（側面）

(乙)

胸廓

- (一)胸椎（再出）
- (二)胸骨1
- (三)肋骨24
  - 眞肋骨（第一—第七）（肋軟骨によりて直ちに胸骨に連る）
  - 假肋骨
    - 第八—第十（肋軟骨により第七肋軟骨に附き間接に胸骨に連る）
    - 第十一、第十二…浮肋骨（肋軟骨は浮離す）

(丙)

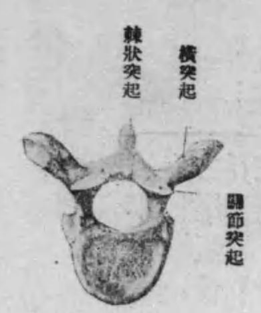
骨盤

- (一)薦骨（再出）
- (二)尾骶骨（再出）
- (三)腸骨2
- (四)坐骨2
- (五)耻骨2

髖骨（無名骨）

一、骨盤の各骨

第二十圖　胸椎（上面）



胸椎（側面）

1 上端。廣く、第五腰椎と關節を作る。

其前方に突出する部分を**薦骨岬**と稱し、關節面の左右に翼の如く廣がれるを**薦骨翼**と云ふ。

2 下端。狹く、尾骶骨と可動關節を作る、之を**薦骨尾骶骨關節**（薦尾關節）と云ふ。

3 前面。平滑にして彎凹をなし、

第十三圖　薦骨（前面）

(一) 薦骨

形三角（五個の骨の癒合）

4 後面。凹凸不平にして彎隆し、中央に五個の**棘狀突起**あり（其中のあるものは左右に分裂す）上方に耳狀粗慥の關節面ありて、腸骨の同狀の面と連りて不動なる**薦腸關節**を作る。

5 側面。

四本の橫線と四對の孔ありて**五個の脊椎骨の集合**なるを示す。

第十四圖　薦骨（後面）

（三）髖骨（無名骨）　腸、坐、恥の三骨の癒合、其癒合部の外面の凹陷を髀臼と云ひ、大腿骨の骨頭を容れ跨關節を作る。

〔1〕腸骨　髀臼より上方の廣き骨。

甲　腸骨體（下方の厚き部分）

乙　腸骨翼（上方の薄き部分）

（二）尾骶骨（尾閭骨）（四個の骨の癒合）　上方は薦骨の下端と薦骨尾骶骨關節を作る。下方に至るに從ひて細くなる。

第十五圖　薦骨（側面）

第十六圖

尾骶骨（前面）

(1) **腸骨櫛**……腸骨翼の上緣

(2) **腸骨前上棘**……腸骨櫛前端の突起

(腸骨前下棘　前上棘の下の小突起)

(3) **腸骨後上棘**……腸骨櫛後端の突起

(腸骨後下棘　後上棘の下の小突起)

(4) **腸骨弓狀線(無名線)**……腸骨内面にて腸骨體と翼との間の弓狀の線。

(5) **薦腸關節**……腸骨弓狀線の後方にある粗慥の耳狀面と、薦骨の耳狀面との間。

〔2〕坐骨　髀臼より下方の厚き骨

（甲）坐骨體（髀臼に接する太き部分）

（乙）坐骨枝

イ、下行枝（後方の枝）

(1) 坐骨棘（下行枝後緣の棘狀の突起）

(2) 坐骨大截痕（坐骨棘より上後方への彎入）

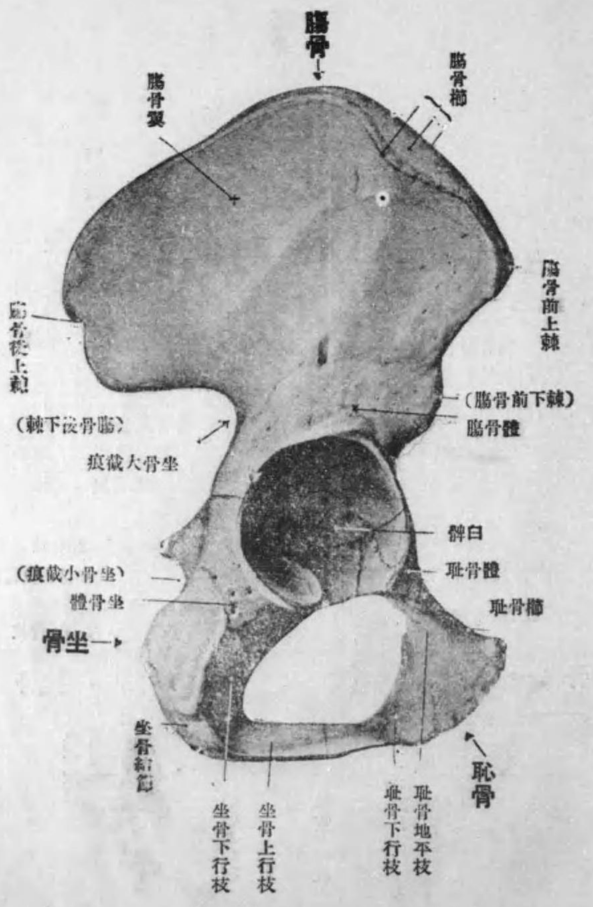
(3) 坐骨結節（下行枝下端、骨の厚き部分）

ロ、上行枝（坐骨結節の部より前上方に昇り恥骨下行枝と接す）

〔3〕恥骨　髀臼より前方の骨三骨中最小

甲　地平枝　前方水平の枝

第十七圖　右髖骨（外面）



(1) **恥骨櫛**（地平枝の鋭き上緣）

(2) **腸恥結節**（恥骨櫛の後方、腸骨弓狀線と相接する部の小隆起）

(3) **恥骨接合**（恥骨軟骨接合）（左右地平枝の前方にて接合する關節、間に軟骨を狹む）

乙　下行枝　恥骨接合の部より下外方に向ひ坐骨上行枝に連る。

(1) **恥骨弓**（左右下行枝間の角、男子は銳角女子は直角又は鈍角）

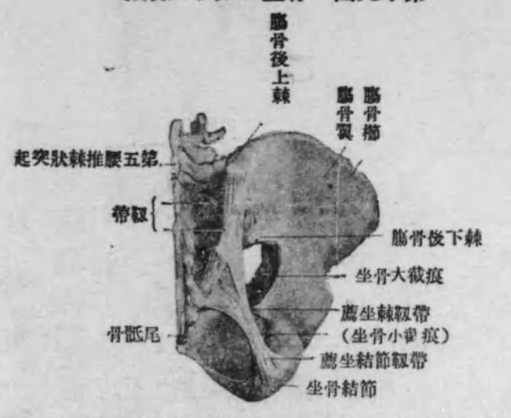
(2) **恥骨弓頂**（弓の頂點即恥骨接合の下端）

(3) **閉鎖孔**（恥骨と坐骨との間の角の丸き三角の孔、生體には閉鎖膜あり、上緣に淺き**閉鎖溝**あり）

第十八圖　右髖骨（內面）

二、骨盤の關節及靱帶

第十九圖　骨盤の靱帶（後面）



(一)薦骨尾骶骨關節……可動

(二)薦腸關節……不動
軟骨及靱帶により固く結合す

(三)恥骨接合（恥骨軟骨接合）……不動
軟骨及靱帶により固く結合す

(一)薦坐結節靱帶
薦骨と坐骨結節との間に張る

(二)薦坐棘靱帶
薦骨と坐骨棘との間に張る

三、大骨盤と小骨盤

甲　大骨盤

薦骨岬
弓狀線　が集まりてなせる上を大骨盤
恥骨櫛
恥骨接合上緣　の輪即『終線』より下を小骨盤と云ふ

(一)大骨盤の壁

後壁……第四、第五腰椎
側壁……腸骨翼
前壁……前腹壁
- 皮膚
- 脂肪組織
- 筋膜及筋肉
- 腹膜

(二)大骨盤の測定

目的　小骨盤の廣狹は、分娩の難易に大なる關係を有するが故に、其廣狹を測定することは極めて必要なるも、生體にてこれを測定し難きを以て、大骨盤を測定して小骨盤の大小を推知するものなり。

徑線

1 **外結合線**(外直徑線)仙19……第五腰椎棘狀突起尖端より恥骨接合上緣まで

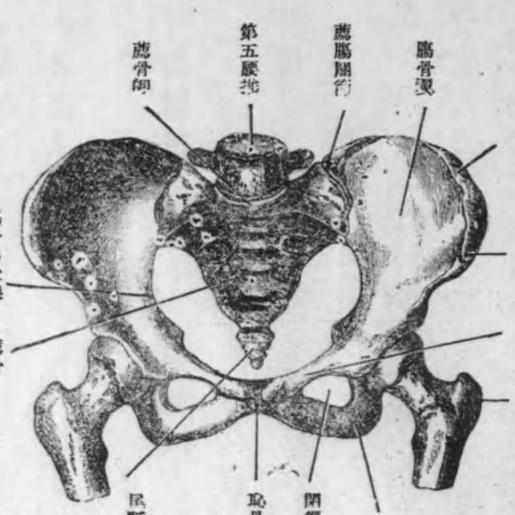
2 **斜徑線**仙20

(一)第一(右)斜徑線……右の後上棘より左の前上棘まで

(二)第二(左)斜徑線……左の後上棘より右の前上棘まで

3 **棘間距離**仙23……左右前上棘の間

第廿圖　骨盤（上前面より見る）



第貳章　軀幹骨……骨盤

4　**櫛間距離**　仙　左右腸骨櫛の最大距離　26

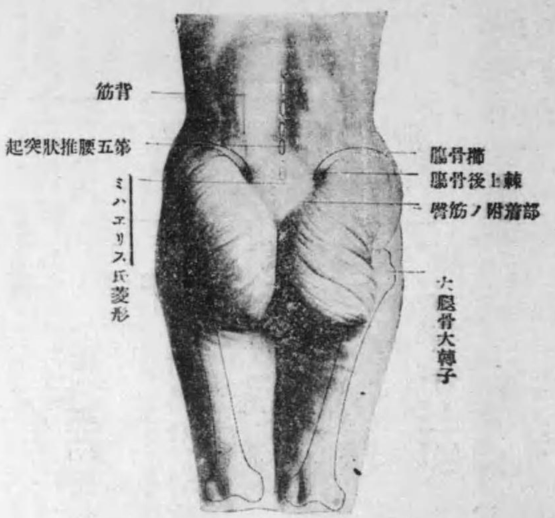
5　**大轉子間距離**　仙　左右大轉子間　29

6　**骨盤周圍**　仙　第五腰椎棘狀突起尖端より始まり、兩側は大轉子と腸骨櫛との間を經、恥骨接合上緣に至る、　75—80

測定器具。骨盤周圍は「卷尺」（即バンドマース）を用ひ、其他は骨盤計を用ひて測る。

◉第五腰椎の棘狀突起の先端を見出す方法　先づ婦人の左右臀部間の上方に於てミハエリス氏菱形を見出し、其の左右の角の附近に於て腸骨後上棘を發見し、これを結びつけたる線の中央の附近に於て、薦骨の第一假棘狀突起を見出し、其の直上に於てこれよりも尙著しき突起を見出したらばこれ即ち求むるところの第五腰椎の棘狀突起なり、これは通常、ミハエリス氏菱形の上角の部にあり。

第二十一圖　ミハエリス氏菱形



乙　小骨盤（骨盤）

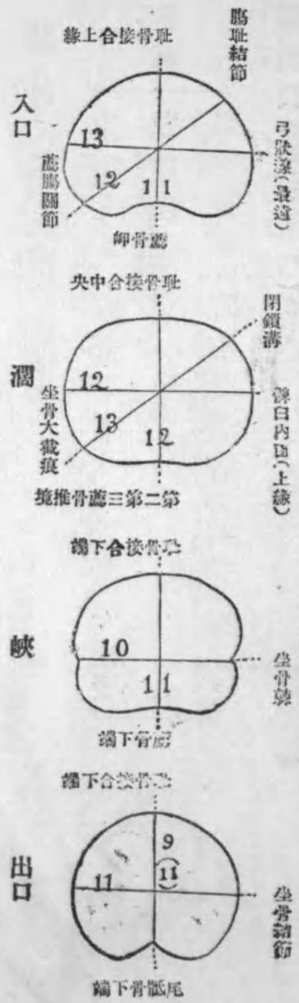
(一)**骨盤入口**（骨盤上口）　葵の葉の形をなす、此入口の形と廣さとにより小骨盤全部の形と廣さとを推定す。

徑線
- 縱徑線(眞結合線)仙11　薦骨岬中央と耻骨接合上緣との間
- 斜徑線仙12
  - 第一(右)斜徑線……右薦腸關節より左腸耻結節まで
  - 第二(左)斜徑線……左薦腸關節より右腸耻結節まで
- 横徑線仙13(13.5)仙　腸骨弓狀線の最大距離

周界
- 後……薦骨岬
- 側……腸骨弓狀線
- 前……
  - 耻骨櫛
  - 耻骨接合上緣

(二)骨盤濶(骨盤廣部)

第二十二圖
小骨盤腔の各面



徑線
- 縱徑線仙12　第二、第三薦骨椎の癒着部より耻骨接合後面中央まで
- 斜徑線仙13
  - 第一(右)斜徑線……右坐骨大截痕上緣より左閉鎖溝まで
  - 第二(左)斜徑線……左坐骨大截痕上緣より右閉鎖溝まで
- 横徑線仙12　左右髀臼内面の上緣間距離

(三)骨盤峽(骨盤狹部)

徑線
- 縱徑線仙11　薦骨下端より耻骨弓頂まで
- 斜徑線(軟部故測り難し)
- 横徑線仙10(10.5)　左右坐骨棘の間の距離

(四)骨盤出口(骨盤下口)

徑線
- 縱徑線仙9(分娩時仙11.)　尾骶骨下端より耻骨弓頂まで
- 斜徑線(軟部故測り難し)
- 横徑線仙11　左右坐骨結節間の距離

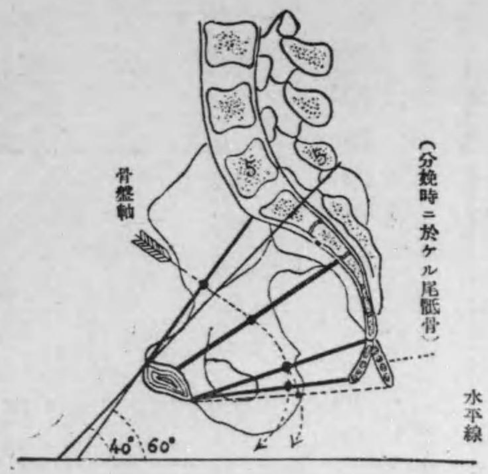
(五)骨盤壁
- 前壁(高さ仙3.5)(耻骨接合の上縁と下縁との間の高さ)
  耻骨及軟骨より成る
- 側壁(高さ仙9.5)(弓狀線と坐骨結節の間の高さ)
  腸骨體
  坐骨
  薦坐結節靱帶
  薦坐棘靱帶
- 後壁(高さ仙12.5)(薦骨岬と尾閭骨尖端の間の高さ)
  薦骨及び尾閭骨より成る

(六)骨盤傾斜の角度

直立位に於て眞結合線と水平線との間になす角度を云ふ

……六十度

第二十三圖　骨盤軸及傾斜



挿入するにも此線に沿ふべし。

(八)男女骨盤の差異

(七)骨盤軸(骨盤誘導線)　入口、濶、峽、出口、の縦徑線の中央を通過せる曲線にして、分娩時に胎兒の通過する方向を示すものなり　骨盤腔内に手指又は器械を生體にては外結合線と水平線との間になす角度を測る……四十度

第　八　表

	女子	男子
(上下)	入口廣く、骨盤腔の下方も割合に廣濶なり。	入口女子よりも狹く、下方は漏斗狀に狹し。
(前)	恥骨弓は直角又は鈍角なり。	銳角(七十―七十五度)。
(後)	薦骨廣く短く、尾骶骨と共に後方へ引退す。	然らず。
(左右)	左右髀臼は著しく相距る。	然らず。
(全輪)	骨盤全輪は低くして幅廣し。	然らず。

第廿四圖　女子骨盤
（上面）

第廿五圖　男子骨盤
（上面）

第廿六圖　女子骨盤
（前面）

第廿七圖　男子骨盤
（前面）

(九)骨盤內の臟器

泌尿器……尿道、膀胱、輸尿管
生殖器……陰莖、子宮、輸卵管、卵巢
消化器……直腸

第三節　四肢の骨

(甲)上肢骨　32×2＝64

(一)鎖骨1……橫にS字形に曲る
(二)肩胛骨1……三角形の骨、胸廓背面上部にあり
(三)上膊骨1……長大なる管狀骨なり
(四)前膊骨2……
　撓骨（拇指側）1上端丸く下端廣し
　尺骨（小指側）2上端太く下端細し
(五)手骨……
　腕骨（手根骨）8不正形の短骨
　掌骨5小なる管狀骨
　指骨14第三節（拇指は第二節）を爪節と云ふ

第二十八圖
右肩胛骨（後面）

(乙)下肢骨　30×2＝60

(一)大腿骨1……最大なる管狀骨なり
(二)膝蓋骨1……其形栗の如し

(三)下腿骨2……
- 脛骨(踝趾側)1太し
- 腓骨(小趾側)1細し

(四)足骨……
- 跗骨7跟骨は跗骨中最大にして踵にあり
- 蹠骨5手の掌骨に相當す
- 趾骨14第三節(踝趾は第二節)を瓜節と云ふ

第二章　軟骨

軟骨は半透明帶青白色にして、彈力あり、軟骨膜にて被はる。

軟骨の主用
- 一骨の間の摩擦を防ぐ　例へは髀臼と大腿骨骨頭の間
- 二兩骨を聯絡せしむ　例へば耻骨接合に於る兩耻骨の間
- 三體の一部を支ふ　例へば鼻梁、耳殼

附　關節(骨の結合)

一、不動關節
- 骨縫合。　鋸齒狀の骨緣互に直接結合す。　例。頭蓋骨
- 軟骨接合。　軟骨を挾みて不動に接合す。　例。耻骨軟骨接合

二、可動關節……關節。　二骨又は數骨互に相聯りて運動す。

例
- 下顎關節
- 四肢の諸關節

第三章　齒牙

(一)名稱　第二十九圖の如し。

第二十九圖　永久齒（右側）

(二)縱斷面　第三十圖の如し。

第三十圖　下顎大臼齒（斷面）

(三)乳齒發生の順序

小小犬切切	2 2 4 3 5
臼臼	
小小犬切切	1 3 4 3 5
臼臼	

(四)乳齒の數にて乳兒の月數を知る法

齒數＋6＝月數　例へば乳齒二本生ぜる兒は 2＋6＝8 卽八ケ月位の乳兒と知るべし

(乙)軟組織

第壹章　皮膚

(一)皮膚の構造。皮膚は**表皮**と**眞皮**との二層よりなり、『皮下結締織』により下層と附着す。

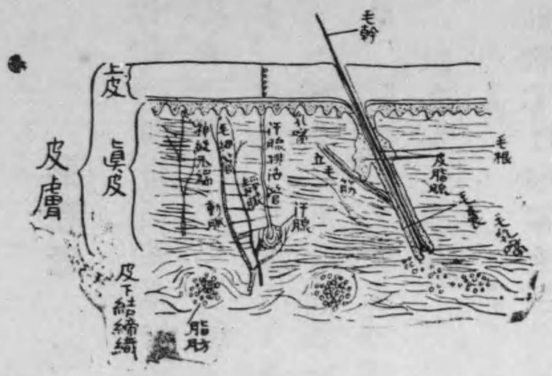
イ、表皮　は極めて薄き層にして、血管又は神經を有せず汗排泄管及毛髮之を貫通す。

ロ、眞皮　上皮との境に乳頭（乳嘴）あり、眞皮中には左の如きものあり。

神經及觸器。動靜脈管及毛細管。

汗腺及其排泄管。毛根及立毛筋。皮脂腺、毛囊及毛孔嘴

第三十一圖　皮膚縱斷面



第貳章　粘膜

(二)　皮膚の主作用

一、身體外面を保護し、
二、觸覺を司り、
三、體溫を調節し
四、身體老癈物を排泄し、
五、呼吸作用を營む。

粘膜は身體外方に開ける孔口又は腔の表面を被ふ膜にして、通常鮮紅色にして、表面に粘液を出し表面粘滑なり。

第參章　漿膜(漿液膜)

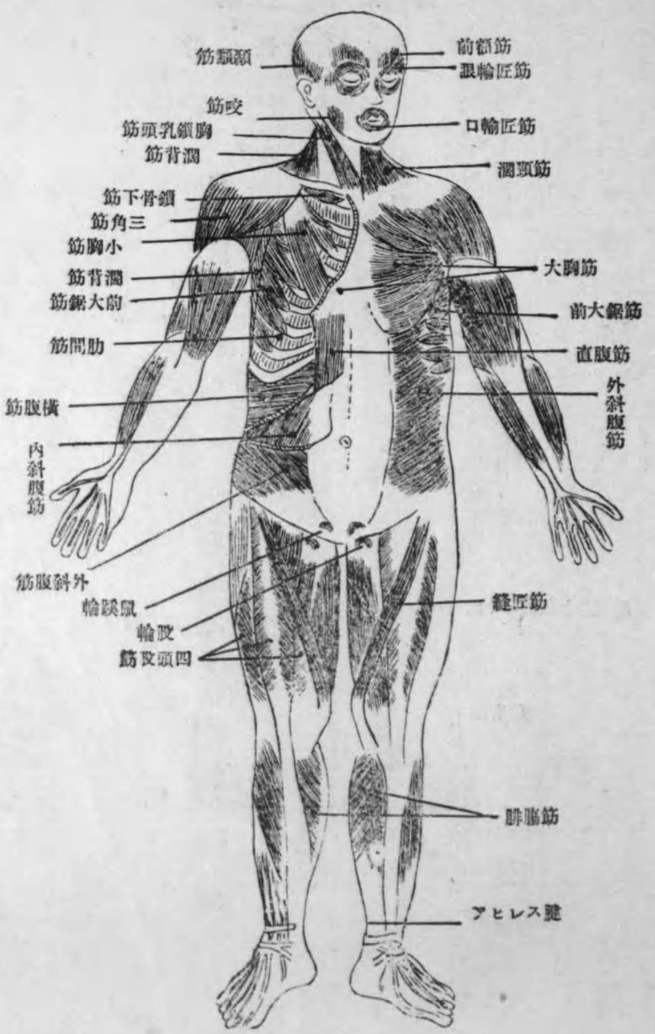
體外に通ぜざる腔の內面を被へる膜にして、表面に漿液を出し其面を滑にし、其腔內にある臟器の運動によりて起る摩擦を減ぜしむ。

例。胸腔の中を被ふを肋膜(胸膜)、腹腔內を被ふを腹膜と稱す。

第四章　結締織

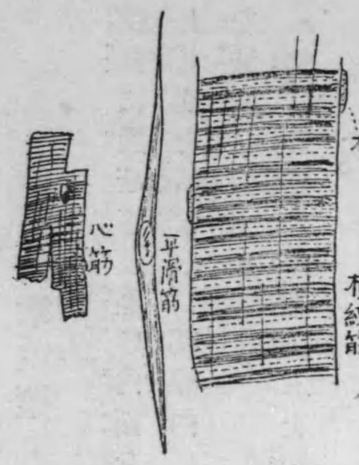
諸組織又は臟器を連絡し、若しくは腔所を充塡するものなり。

第三十三圖　主ナル骨骼筋（前面）



結締織には（粗にして軟きあり（例へば皮下結締織）　六〇
密にして硬きあり（例へば靱帯・腱）

第三十二圖　筋肉の種類（顯微鏡にて廓大）



第六章　筋肉

第五章　脂肪組織

粗なる結締織の間に無數の脂肪細胞が集まりたるものにして、皮下其他諸臓器の周圍等にあり

第三十五圖　骨骼筋

(一) 筋肉の種類

横紋筋（骨骼筋）
- 通常骨と骨との間に附着し其收縮により骨の運動を起す……隨意筋
- 子宮・膣・胃・腸・血管等の壁を構成し其運動を營む
- 心臟の壁を構成し其運動を營む……不隨意筋

滑平筋（平滑筋）

心筋

(二) 骨骼筋の各部　第三十五圖の如し。

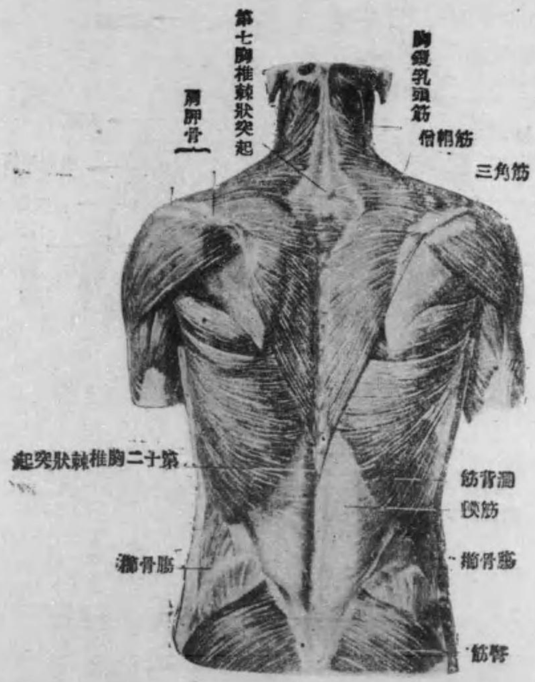
(三) 主なる骨骼筋の名稱　第三十三及三十四圖の如し。

第七章　循環器

第一節　血管系

第三十五圖

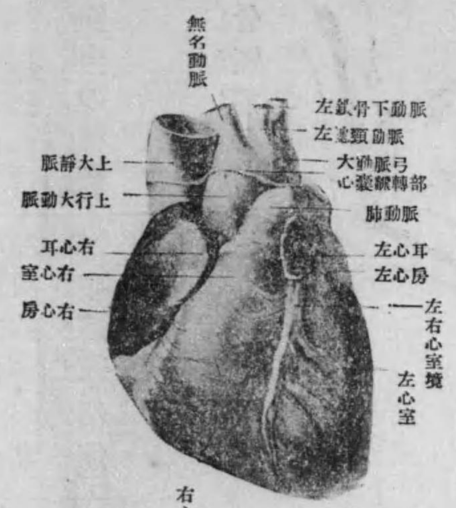
骨骼筋（背面）



一、心臟

（内臟の中へ入れても可なり）

(一)位置　胸腔の下部に於て、中央より左方に偏し、左右の肺の間に位す。



第三十六圖　心臟（前面）

(二)形狀　圓錐體をなし、其基底は右上方に向ひ第三肋軟骨の高さに於て胸骨の後に在り、此部に大血管出入す。

圓錐の尖端を心尖と云ひ左下方に向ひ、左乳頭より少し内方にて第五肋骨と第六肋骨との間に位す。

(三)大さ　其人の手拳大。

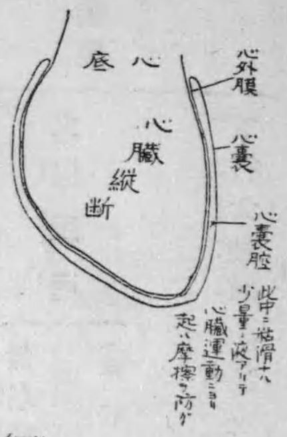
(四)心嚢　心臟を包む嚢にして漿膜の一種なり。

故に其内面粘滑なり。

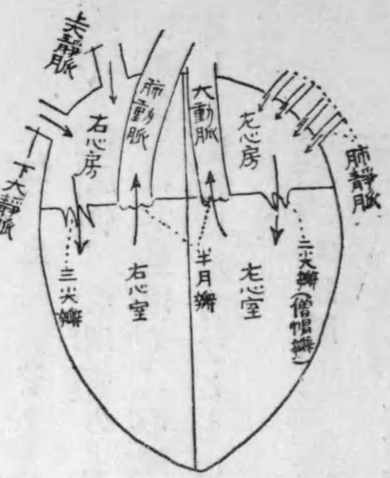
(五)心外膜　心嚢のつゞきの漿膜にして、心臟を直接に被ふ部を云ふ。

(六)心臟内腔　第卅八圖の如し。

第三十七圖　心嚢



第三十八圖　心臟内腔



二、血　管

動脈管、靜脈管、毛細管の三あり。

一動脈管は其壁厚く。心臟より起り漸次分岐し全身諸部に達し毛細管に移行するものにして。動脈血を心臟より全身に送るものなり。

上行大動脈

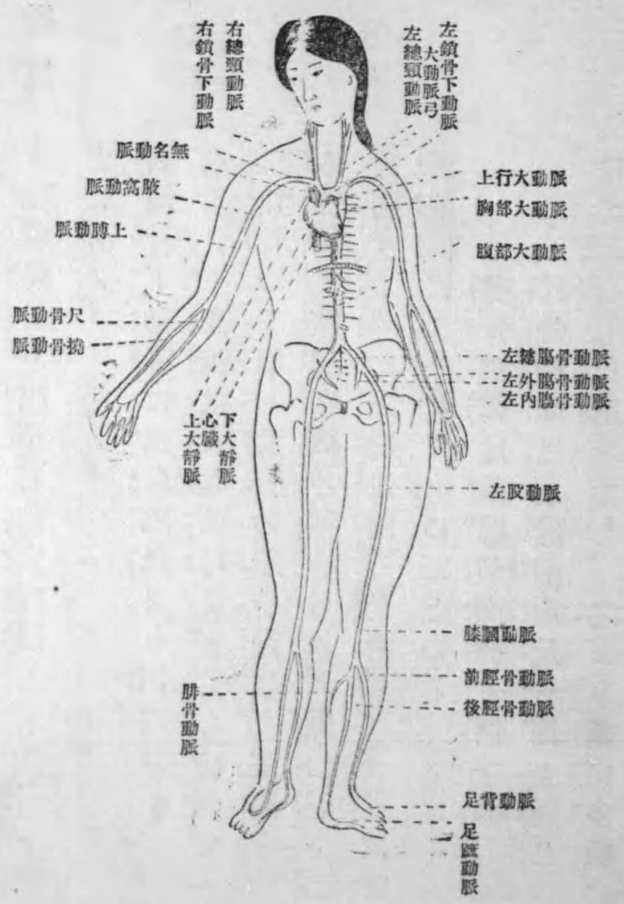
△**大動脈弓**（左室より出づ）

- 無名動脈（直接に）
  - 右總頸動脈を出す。
  - 右鎖骨下動脈を出す。
- 左總頸動脈を出す。
- 左鎖骨下動脈を出す。

下行大動脈（胸部及腹部大動脈）

- 右總腸骨動脈。
- 左總腸骨動脈。

第三十九圖　主要なる動脈



△**無名動脈**　大動脈弓より出で、右總頸動脈と右鎖骨下動脈とに分る。

△**鎖骨下動脈**　右鎖骨下動脈は無名動脈より出で……（共）
左鎖骨下動脈は大動脈弓より直ちに出で……（共）
に鎖骨の下第一肋骨の上を通じ、腋窩を通ずる部にて**腋窩動脈**と稱せられ、更に進で上膊を通ずる時に**上膊動脈**と稱せられ、遂に肘關節前面にて分れて次の二となる。

(一) **撓骨動脈**は前膊前面撓骨側を通じ（手）
(二) **尺骨動脈**は前膊前面尺骨側を通じ（手）
にて相合し弓狀をなし、之より指に多數の小枝を出す。

△**總頸動脈**　右總頸動脈は無名動脈より出で（何れも頸）
左總頸動脈は大動脈弓より直に出で（何れも頸）
の兩側を通じ分れて（**內頸動脈**／**外頸動脈**）となり共に頭部を養ふ。

△**總腸骨動脈**　下行大動脈の末端は、第四腰椎下緣にて分れて左右の總腸骨動脈となる。左右共に薦腸關節の前にて更に分れて（內腸骨動脈（下腹動脈）／外腸骨動脈）となる。

(一) **內腸骨動脈**（下腹動脈）　骨盤內に多くの枝を出す、就中**子宮動脈**は必要なるものなり。

(二)**外腸骨動脈**　恥骨の上を過ぎて**股動脈**となり、大腿の内側を下りて大腿下部に至るに從ひ漸次に後方へ廻り、膝膕に至り**膝膕動脈**となり直ちに（**前脛骨動脈**／**後脛骨動脈**）に分る。

(一)**前脛骨動脈**　は脛骨前面を下り足脊に至り**足脊動脈**となり。

(二)**後脛骨動脈**　は脛骨後面を下り足蹠に至り**足蹠動脈**となる。

後徑骨動脈の上部より**腓骨動脈**を出し腓骨後面を下る。

二靜脈管　動脈管に比すれば其壁薄く、其内面に數多の「瓣」を有し血液の逆流を防ぐ。全身諸部の毛細管より起り、漸次集まりて太くなるものにして。靜脈血を心臟に向て還流せしむるものなり。

主なる靜脈管は又同じ名の動脈管と竝行し、通常は一本の動脈に對し二本の靜脈を伴ふも、皮下靜脈管は動脈に關係なく獨行し皮膚の表面より青筋として認め得。

三毛細管　は動脈管と靜脈管との間に介在せる、極めて細き管にして。全身殆ど至る處に存在し、顯微鏡にて初めて之れを認め得。此毛細管の膜壁は極めて薄く動脈血中の營養素を滲出せしめ其部分の組織細胞を養ひ、組織中の老廢物の一部を收受して靜脈管に送る、其他毛細管壁を通じ酸素若くは炭酸を出入し得。

第九表

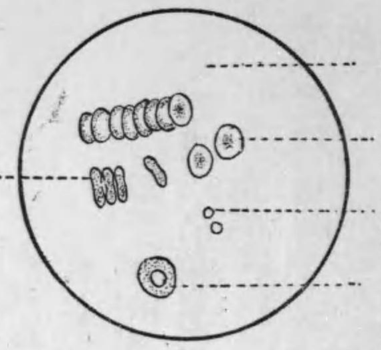
	動脈管	毛細管	靜脈管
1	壁厚	壁極めて薄	壁薄　靜脈瓣あり
2	心臟より起り 毛細管へ移行	全身殆ど到る處に存在	毛細管より起り 心臟へ還流
3	通常動脈血を送る	營養素・老廢物の出受 酸素・炭素の出受	通常靜脈血を運ぶ

三、血液

(一)血液の成分

血液 ┬ 赤血球……（淡黃色なるも集まりて赤色に見ゆ）
　　 ├ 白血球……（無色有核）
　　 └ 血漿 ┬ 纖維素……（無色透明）
　　　　　 └ 血清 ┘ 血餅

第四十圖　血液（六〇〇）



血液は血管内にあり**漿**は、**血漿**中に多數の**赤血球**と少數の**白血球**とが浮游するものなれども。血管外に出る時は、赤血球、白血球及び**纖維素**（血漿中より出づ）が共に凝結して**血餅**（凝血）となり別に透明の液を生ず之を**血清**と稱す。

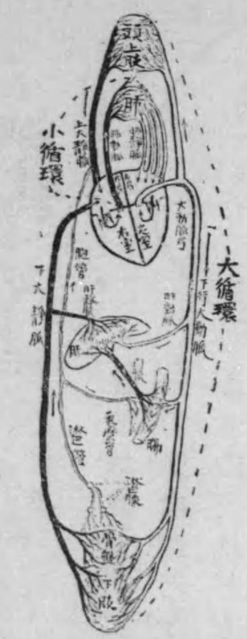
第四十一圖　血清と血餅

(二)血液の二種｛動脈血　鮮紅色にして酸素に富み動脈管を流る
　　靜脈血　暗赤色にして炭酸に富み靜脈管を流る
　　(但し肺循環及臍帶循環は例外とす。)

四、血液循環

一　大循環(全身循環)　左心室より一本の大動脈として起り、全身に分布して毛細管を經て靜脈管となり遂に上下の二大靜脈として、右心房に還る。

二　小循環(肺循環)　右心室より一本の肺動脈として起り、肺にて毛細管となり四本の肺動脈として左心房に還る。



第四十二圖　血液循環

五、心臟搏動及脈搏

(一)心臟は身體諸部より血液を受け又身體諸部へ血液を送るを以て絶えず運動す、此運動を搏動と云ふ此搏動の際聞ゆる音を心音と稱す。

(二)脈搏は心臟搏動毎に傳はる動脈管の波動なり。故に脈搏數は心臟搏動數に等しく、平均一分間に七十二なり(卽ち六十乃至八十にして女子は男子より僅かに多し)

(血液が身體を循環する時間は凡そ二十六回の搏動の時間に等し)

第二節　淋巴管系

一、淋巴管(水脈管)

淋巴管とは淋巴液を導く細き管にして血管の如く全身各處に分布し、組織間の淋巴液を集めて漸次に太くなり遂に靜脈管

内に注ぐ。（胸腔の後部にある太き淋巴管を胸管と稱す、之れは左鎖骨下靜脈に注ぐ）

二、淋巴液

淋巴液は無色透明の水樣液にして、全身の諸組織に分布せられたる血液の一部分が毛細管壁より組織の間に滲出して變化したるものが卽ち淋巴液なり、此の淋巴液の一部は直ちに再び毛細管の血液中に滲入すれども、他の部分は淋巴管内に入り此管内を流る。

腸壁に於ける淋巴液は、飲食物より吸收したる多量の營養物を含むを以て、乳汁樣の白色液となる、此淋巴液を一名乳糜液と稱し、此乳糜液を導く管を乳糜管と云ふ、乳糜管は遂に他の淋巴管の如く胸管に達す。

三、淋巴腺

淋巴腺は淋巴管の途中諸所に介在し、淋巴液中の夾雜物を抑留す。恰も下水道に於ける水溜の如し。

例鼠蹊腺、腋窩腺、頸腺、等

第四十三圖

腦髓（右側面）

第八章　神經系

一、腦髓

腦髓は頭蓋腔にあり。大腦、小腦、及延髓の三に分つ。

二、脊髓

脊髓は延髓の續きにして脊柱管内にあり。

三、神經

神經は白色の纖維なり。

腦神經（十二對）は腦底より出で、頭蓋底の裂孔を通じ
脊髓神經（卅一對）は脊髓より出で、脊柱の椎間孔を通じ
普く全身（毛髮、表皮、爪を除く）に分布す。

知覺神經（求心性）は…知覺（痛痒、寒熱、硬軟粗密等）を感ず。
運動神經（遠心性）は…筋肉の運動を起す。

第四十四圖

脊髓（背面）

四、五官器

(一)視官は眼球中にあり、視覺を司る。
(二)聽官は內耳中にあり聽覺を司る。
(三)嗅官は鼻粘膜にあり嗅覺を司る。
(四)味官は舌の乳頭中にあり味覺（甘、酸、辛、苦、鹹等）を司る
(五)觸官は皮膚の乳頭にあり知覺（痛痒、寒熱、硬軟、粗密等）を司る。

第九章　內臟

第

體腔		
頭蓋腔	腦髓	
脊柱管	脊髓	
	大動脈、大靜脈、心臟	

十表

及	內臟	
胸腔	腹腔	骨盤腔（女子）
氣管、氣管枝、肺 食道、胸腺	胃、腸、肝、膽囊、膵 脾、副腎、腎、輸尿管	膣、子宮、輸卵管、卵巢、輸尿管、 膀胱、尿道 直腸

第一節　呼吸器

一　鼻腔

吸氣を溫め、毛によりて塵埃を去る。鼻腔上部の粘膜は嗅覺を司る。

二　口腔

鼻腔より空氣の通じ得ざる時に空氣の通路となる。

三　咽頭

口腔より食道に通ずる管卽ち消化管と鼻腔より氣管に至る道卽ち氣道との交叉點なり。

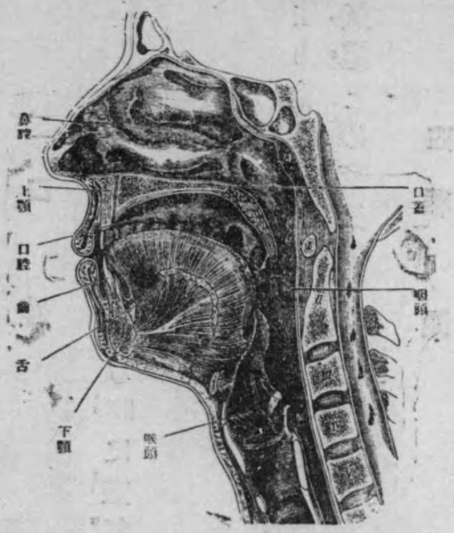
四　喉頭

喉頭は前頸部の中央に位する短かき管にして、數箇の軟骨よ

りなる。其の管中に左右より聲帶張りて其の振動によりて音聲を發す。

第四十五圖

頭首下半部（矢狀斷）



喉頭の上口の前方には會厭軟骨と稱する瓣狀のものありて、食物を嚥下する際に、後へ屈折して上口を蓋ひ、食物の喉頭に入るを防ぐ。

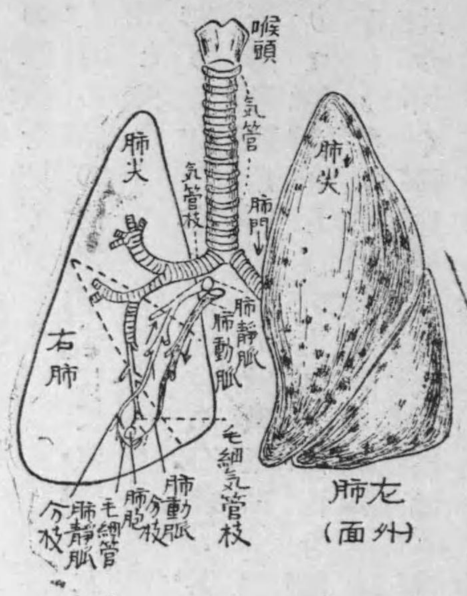
五　氣管

氣管は喉頭の下に接續し、食道の前を下降し、先づ左右の氣管枝に別る。（肺の中に入りて後は更に多數の細き枝に別れ遂に毛細氣管枝となる）

六　肺臟

第四十六圖

呼吸器（胸部）



(一)　肺臟は胸腔內、心臟の左右に位し、右肺は三葉、左肺は二葉に別る。左右いづれも上端は尖りて之れを**肺尖**と稱す。

(二)　肺の外面は**肋膜**（胸膜）を以て被はる、肋膜は此の外に胸壁の內

面を被ふものあり、この兩者の間は滑かにして呼吸の際の摩擦を防ぐ。

(三) 左右の肺の內側中央にて氣管枝及血管の通ずる場所を肺門と稱す。

(四) 肺の構造。肺は『氣管枝の分枝』と『其の末端にある肺胞』及『血管(肺動脈肺靜脈の分枝及毛細管)』との三種が結締織によりて結合せられ、之れが表面を肺肋膜によりて包まれたるものなり。

呼吸器の生理

此の如く構造せられたる肺は、肉眼上海綿樣にして彈力を有す、此の彈力は結締織中に彈力纖維多きが故なり。

呼吸器は　呼吸及音聲を司る。

(一) **呼吸**(廣意)に二あり。

イ、外呼吸(又は呼吸)とは、肺殊に肺胞內の空氣と其周圍の毛細管內の血液との間に行はるゝ瓦斯交換をいふ。これにより空氣中の酸素を血液中に吸收し、血液中の炭酸を空氣中に排出す。

ロ、內呼吸とは、全身毛細管內血液と組織との間に行はるゝ瓦斯交換を稱す。これより血液中の酸素を各組織に與へ之を營養し、其新陣代謝の結果生じたる炭酸を血液中に收受す。

(二) **呼吸運動**　肺胞內の空氣と外圍の空氣と交換せんが爲めに肺を縮小又は擴張せしむる運動を云ふ。此運動は呼吸

筋により起る。呼吸筋とは胸廓の骨に附着せる種々の筋肉の外に横隔膜及腹筋を云ふ。

(三)　呼吸數は次の如し。

一年未滿	一分間　三〇―四〇
大人	一分間　一六―二〇(平均一八)

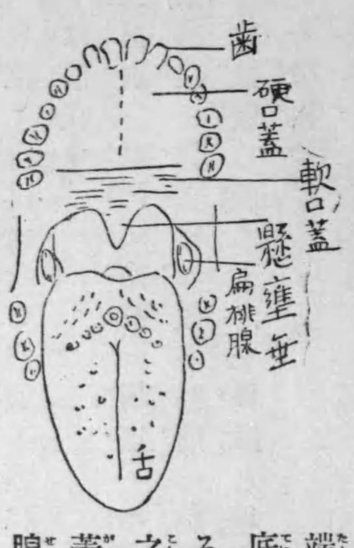
第二節　消化器

消化管(口腔、咽頭、食道、胃、腸)と腺(唾腺、膵臓、肝臓)とより成る

一　口腔

口蓋　口腔の上壁を口蓋と稱す、其の前方大部分は硬くして之を**硬口蓋**と稱し、其後方は軟かにして**軟口蓋**と稱す、其後端中央に**懸壅垂**あり、其の基底の部分より左右に弓狀に走る線あり、之を**口蓋弓**と稱す、之れに前後の二あり、前後口蓋弓の間にはさまる腺を**扁桃腺**といふ。

第四十七圖　口腔



舌　舌は細かき筋肉より成り、表面粘膜を以つて被はる、この粘膜には無數の乳頭存在す。舌の粘膜には普通の知覺神經の外に乳頭内に味官を有す。

二、咽喉

咽頭は氣道と消化管との交叉點なり。

三、食道

食道は咽頭と胃との間にありて、氣管の後方を下降し、橫隔膜を貫きて腹腔に入るや直ちに胃に連る。

四、胃

(一)位置　胃は大なる筋質の嚢にして、腹腔の上部に於て左方に偏在す。

(二)區別　噴門　幽門　胃底　小彎　大彎　の區別あり。

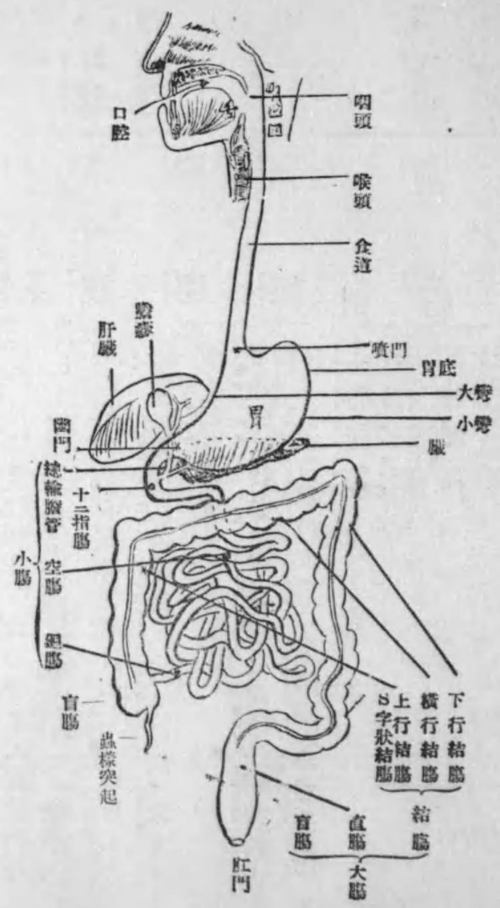
(三)構造　胃壁は漿膜、筋層、粘膜の三層より成る。粘膜には無數の腺ありて之を胃腺と稱す。胃腺よりは透明なる胃液を分泌す。

五　腸

(一)位置　腸は腹腔の大部を占むる長き管にして、大人の腸は身長の四倍半なり。

(二)區別

第四十八圖　消化器略圖



腸
- 一、小腸（細く壁薄）
  - 十二指腸
    - 幽門より凡そ十二指横徑の間の部分にして、輸膽管及膵管の相合したる管こゝに開口す
    - 空腸（十二指腸以外の小腸の五分の二）解剖して之を檢するに常に空なる故にかく名づけしならん
    - 廻腸（十二指腸以外の小腸の五分の三）最も多く迂廻せる部分なり
- 二、大腸（太く壁厚）
  - 盲腸
    - 右腸骨部に位す、廻腸との境に廻盲辨あり（上下二枚）盲腸の底部に蟲樣垂（蟲樣突起）あり
  - 結腸
    - 上行結腸
    - 横行結腸
    - 下行結腸
    - S字狀結腸
  - 直腸
    - 鷹骨の前方を直下し肛門に終る
    - 肛門には括約筋ありて平常は之を閉づ

（三）構造　腸壁は漿膜、筋層、粘膜の三より成り、粘膜には無數の腺あり之を腸腺と云ひ腸液を分泌す。腸の粘膜には皺襞多くして吸收の面甚大なり、殊に小腸には表面に更に絨毛を有し其吸收の面を愈々大とす。

一　唾腺（唾液腺）

唾腺とは唾液を分泌する所の腺にして、大なる唾腺は左右に三對あり。

(一) **耳下腺**　耳の下前方にあり
(二) **顎下腺**　下顎骨の下にあり
(三) **舌下腺**　舌の下部、口腔粘

第四十九圖　唾　腺

膜の直下に位す。

二　肝臟

(一) 上腹の右側、横隔膜の直下に在り、楔狀をなす。

(二) 上面は圓形に隆起し恰も横隔膜の穹窿に適合す、下面は少しく陷凹す。

(三) 肝臟は大なる右葉と小なる左葉との二より成り、其兩葉内部に於て分泌せられたる膽汁は、輸膽管により膽囊に導かれ、更に總輸膽管により十二指腸の後壁に膵管と共に開口す。

三　膵臟

(一) 胃の後方に横はれる長大なる腺にして、右端は太く左端は細し。

(二) 分泌したる膵液は膵管によりて導かれ總輸膽管と合同して十二指腸の後壁に開口す。

消化器の生理

生活作用により失はれたる人體の成分は、血液中の營養分により補はれざるべからず、此の營養分は飲食物より來る、而して其の飲食物が血液中に入る前には、必ず消化せられざるべからず。

其食物の主成分は

(一)(二)(三)(四)(五)
蛋白質
脂肪（無機物）
含水炭素
鹽類（有機物）
水

にして、之れ等の食物は之れを

(一)消化器の運動により細小にし且つ運搬し。
(二)**消化液**の作用により吸收し易き狀態に變じ。
(三)消化管の**吸收力**によりて吸收するものなり。

一　消化器の運動

一　**咀嚼運動**により食物を細挫す。
二　**嚥下運動**により食物を胃に向つて下降せしむ。
三　**胃の運動**により食物を胃液とよく混和し粥の如き物となす、之を食糜と稱す。食物食糜となりたる時は幽門開口して之を腸に送る。
腸の運動は上方より下方に向つて蠕の如く運動す、之れを蠕動と云ふ、之により食物の消化及吸收を助け且つ食物及其殘渣（糞便）を輸送す。

二　消化液の作用

消化液の主なるものは、一唾液、二胃液、三膵液、四膽汁、五腸液なり。

一　**唾液**　唾液腺より分泌せらるゝ透明の液、弱「アルカリ」性。
効用——一　食物中の澱粉質を葡萄糖に變化す。
　　二　既に咀嚼せられたる食物を一塊となし、其表面を

包み之を粘滑ならしむ。

三　常に口腔内を濕潤ならしめ舌の運動に便にす。

二胃液　胃粘膜の胃腺より分泌せらるゝ無色透明の液にして酸性反應を呈す。

主成分は「ペプシン」、鹽酸なり。

効用
- 「ペプシン」は、酸性の液の中に於て、食物中の蛋白質を「ペプトン」等に變化す。

三膵液　膵臓より分泌せらるゝ唾液の如きものにして、之れも亦「アルカリ」性なり。

効用
- 一　澱粉質を葡萄糖に變化す。
- 二　蛋白質を消化す。
- 三　脂肪を變化す。

四膽汁　肝臓内にて分泌せらるゝ黄褐色苦味の液にして、「アルカリ」性を呈す。總輸膽管を通じ十二指腸に注ぐ。

効用
- 一　膵液の脂肪消化を助く。
- 二　腸内過度の腐敗を防ぐ。
- 三　腸粘膜を刺戟して分泌を促し、蠕動を亢む。

五腸液　腸粘膜の腸腺より分泌せる「アルカリ」性の液なり。

効用
- 一　澱粉を砂糖に變化す。
- 二　腸液中の粘液によりて糞便の形成を助け、且つ其通過を容易ならしむ。

三　消化器の吸收作用

口腔、咽頭、食道に於ては吸收作用なし。

一胃の吸收　胃壁の血管中に吸收せらる。

二小腸の吸收　十二指腸及空腸に於て吸收最も著し。

三大腸の吸收　大腸に於ても亦盛に吸收作用あり。

○凡て腸の吸收の路に二あり。

(一)　脂肪は主として乳糜管に入り腸間膜の淋巴管を經て胸管に合し左鎖骨下靜脈に注ぎ血液と混じ全身諸組織を養ふ。

(二)　脂肪以外のものは腸壁の血管に吸收せられ、腸間膜靜脈及門脈を經て肝臟に入る。

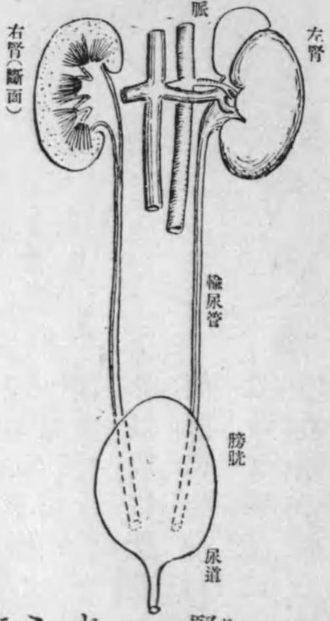
第三節　泌尿器

一腎臟

(一)位置　腹腔上部、脊柱の左右に一個づゝ存在す。

(二)形狀　陰元豆の如く、其の凹みたる側は內方に向ひ**腎門**と稱す。

(三)構造　腎門より腎動脈が入り腎靜脈及輸尿管出づ、此輸尿管の初めに**腎盂**あり。



腎動脈は腎臟に入りて漸次に細き枝に分れ、遂に毛細管となる、この毛細管は絲毬の如くに集る、これを**マルピギー氏小體**(絲毬)と稱す、之は主として腎臟の外層卽ち

皮質の部分にあり。この小體より出づる血液は靜脈管に移行して漸次に相合して太くなり遂に腎靜脈として腎臟を去る。

第五十一圖　腎　臟　（摸型圖）

小體の周圍より始まる所の極めて細き長き管を**細輸尿管**と稱す、これは或は迂曲し或は直行して遂に眞直に相並行せる稍太き**集合管**となりて腎盂に開口す、この開口部は乳頭の如くに隆起せるを以てこゝを**腎乳頭**と稱す。

尿の分泌

凡て集合管の並列する場所は內層なり之れを**皮質**に對して**髓質**と稱す。

腎臟內の毛細管又はマルピギー氏小體內を流るゝ血液中の老廢成分は其の毛細管壁より細輸尿管內に滲出し、細輸尿管內を通じ腎盂に集合し、輸尿管を經て膀胱に至る、これ卽ち尿なり。

二　輸尿管

輸尿管は左右腎臟より各一本づゝ出で、下降して膀胱の後壁下部に注ぐ。

三　膀胱

(一)位置　恥骨接合の後方、子宮の前方(男子なれば直腸の直前)に位し、輸尿管によりて送られたる尿を潴溜する所なり。

(二)區別　膀胱の下方は漸次に狹小となる、これを**膀胱頸**と稱す、此所に括約筋ありて尿の潴溜するも濫に流出することなからしむ。

(三)構造　筋質の囊にして、外面は漿膜にて被はれ、內面は粘膜にて被はる。

四　尿道

尿道は膀胱頸より出づる筆の軸の如き細き管にして、恥骨接合の後方を通ず。

女子にありては僅かに四——五仙米にして膣の前方を通じ陰門の前庭に開口す、開口部を**尿道口**(尿道外口)と稱す。

(帶黃透明、通常酸性反應

尿　比重　一、〇一〇——一、〇二五

(一晝夜の分泌量　女子　千立方仙米內外

男子　千立方仙米——千五百立方仙米

第四節　生殖器

男性生殖器

甲　外生殖器

一　陰莖

二　睾丸及副睾丸

精子(精絲、精蟲)は睾丸にて作らる。

其形圖の如く、頭部、中部、尾部よりなり、長さ〇、〇五密

欠

米なり。適當の液中に於ては頗る活發に運動するものにして、交接時には一種の液と共に射出せられ、婦人の體内に入りては三週間以上も長く生存し得。

乙　内生殖器

一　精系
二　精嚢
三　攝護腺

女性生殖器

第四節　生殖器：子宮

(一)位置　前方は尿道及び膀胱、後方は直腸に接し、上方は子宮に連り、下方は膣口となりて前庭の下部に開く。長さ凡そ八糎米。

(二)形狀　骨盤軸の方向に從ひて前方に彎曲し、膣口に近き處は狹く、上方に至るに從ひ廣し。

(三)區別　最も上方にて最も廣き部分を**膣穹窿**といふ。其の穹窿の中央に**子宮膣部**突出す。これによりて前膣穹窿、後膣穹窿、側膣穹窿を區別す。

(四)構造　膣壁は筋肉より成り、內面は粘膜を以つて被はる。

二　子宮

(一)位置　小骨盤の中央に位し、前方は膀胱に、後方は直腸に

接し、上方は何物なく只腸を載せ、下方は膣に連り、側方は輸卵管及濶靱帶に連る。

(二)形狀　扁平茄子狀をなし、其の太き端は前上方に向ひ、細き端は下方に向ふ。

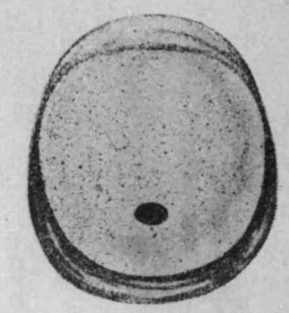
長さ凡そ八仙米餘、幅は上部に於て廣く凡五仙米なり。

(三)區別　上方の主部を**子宮體**と稱し、下方の小部を**子宮頸**と稱す。其の間僅かに狹窄して兩部の境界を示す。

子宮體の後面は前面よりも膨隆著しく、體の最上方廣き膨隆(卽ち輸卵管の開口部より上方)を**子宮底**と稱す、子宮頸の下部は殆ど椎の實の如く膣窮窿内に突出す、この部分を**子宮膣部**といふ。これを下方より覗く時は前後に扁平の圓形をなし、其の中央に**子宮外口(子宮口)**開く。子宮外口よ

り前方を**子宮前脣**といひ、後方を**子宮後脣**と稱す。子宮前脣は後脣よりも通常長くして且つ厚し。

第五十七圖
子宮膣部



(三)子宮膣の區別　子宮體の膣を**子宮體膣**といひ、子宮頸の膣を**子宮頸管**といふ。

(1)**子宮體膣**は前後に扁平にして左右に廣く、前額斷に於て三角形をなし三角の頂端は下方に向ひ頸管の上端に連る、此處を**子宮内口**と稱す。三角の底は上方に向ひ其の兩端の

角は左右の輸卵管に連る、これを輸卵管子宮口と稱す。

(2) **子宮頸管**は紡錘形をなし、子宮體腔との境の狹き部分は子宮内口にして、下方の狹き部分は子宮外口(子宮口)なり。

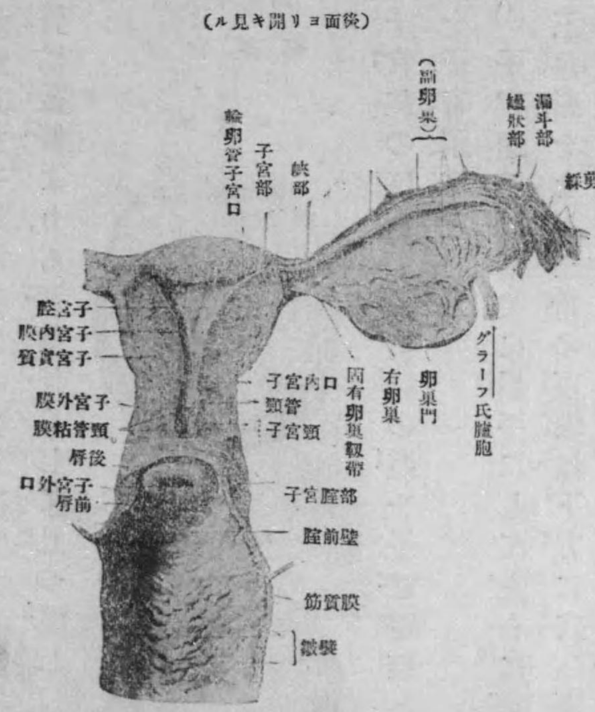
(四) 構造　子宮内膜(粘膜)、子宮實質(筋質)、子宮外膜(腹膜)の三より成る。

(1) **子宮内膜**　子宮體腔及び頸管の内面は粘膜を以つて被はる。この粘膜を子宮内膜と稱す。

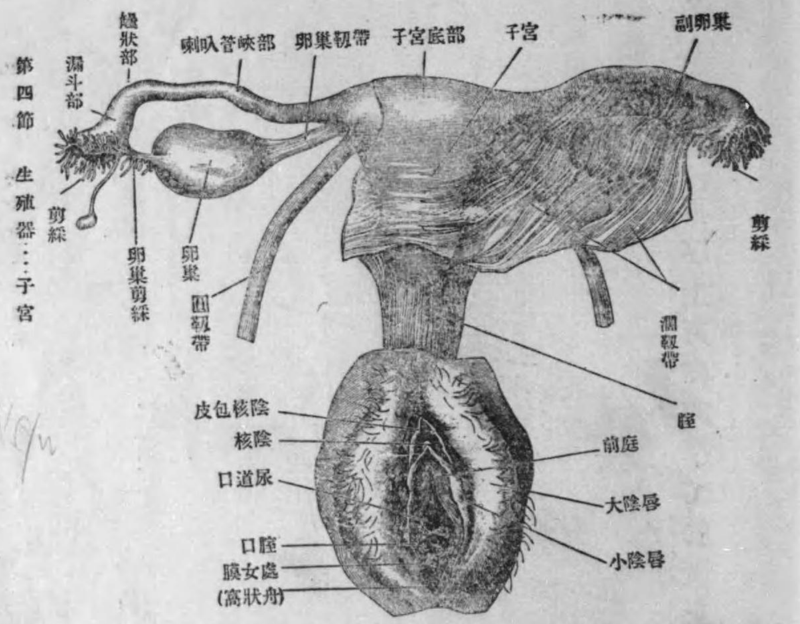
(2) **子宮實質**　平滑筋と僅かの結締織とより構成せらる、其の厚さは凡そ一仙米半

第五十八圖　子宮　腟　右輸卵管　右卵巢

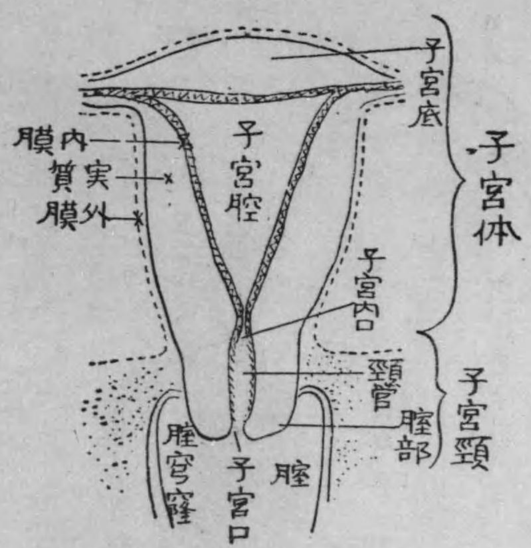
(後面ヨリ開キ見ル)



第五十九圖　女子生殖器　(前面)



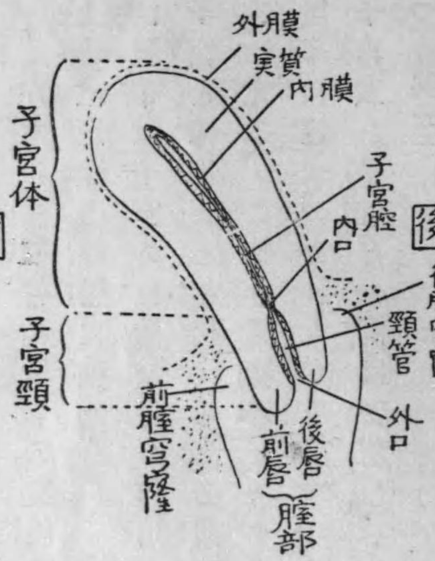
第六十圖　子　宮（前額斷）



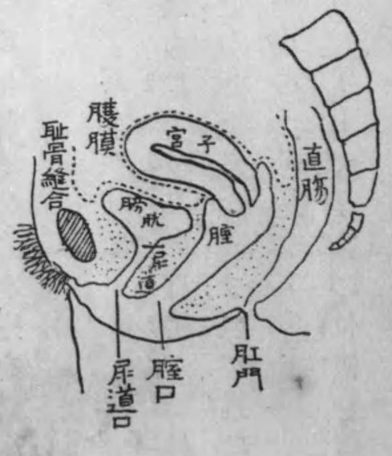
なり。

(3) **子宮外膜**　子宮體の外面は腹膜を以つて被はるこれを子宮外膜と稱す。この腹膜は一枚の膜を二枚に折りて上より子宮を被ひ前後より合せたるが如きものにして、子宮に直接密着する部分を外膜といふ。其子宮の前面を被ひたるものは、再び上方に向ひて膀胱を被ひ、更に前腹壁の内面に移る。子宮の後面を被ひたるものは、又上行して直腸の前面を被ふ。子宮を前後より被ひて左右に餘りたる兩側

第六十一圖　子　宮（矢狀斷）



第六十二圖　骨盤部（矢狀斷）



の腹膜は前後の二枚相接して**濶靱帶**（**廣靱帶**又は**扁靱帶**）となる。左右の濶靱帶の續きの腹膜は、更に骨盤の左右壁を被ひ、上方は腹壁の腹膜に移る。

濶靱帶は子宮の位置を保つ作用あり。（其一）

子宮と輸卵管と相接する部の前面より圓き索狀の靱帶が前外方に走る、これを**圓靱帶**と稱す。これは腹膜に包まれて遂に陰阜に達す、これも亦子宮の位置を保つ。（其二）

子宮頸と膀胱との間は密着し、これによりて子宮の位置を保つ。（其三）

子宮頸と薦骨との間には**子宮薦骨靱帶**ありこれも亦子宮の位置を保つ。（其四）

三　輸卵管（喇叭管）

（一）位置　子宮底の左右より出で、濶靱帶の上緣に於て其の膜の折目の間を通り、僅に迂曲して側方に走り其の先端は少しく後方に曲る。

（二）形狀　細長き喇叭狀の管にして左右一對あり。長さ凡そ八仙米。

（三）區別

(1) **子宮部**　子宮壁の間を通ずる部分にして、子宮腔に開ける口を**輸卵管子宮口**といふ。

(2) **峽部**　子宮に近き細き部分をいふ。

(3) **壺腹部**（**纏狀部**）　外方の廣き部分をいふ。

(4) **漏斗部**　最も先端の漏斗の如く開ける部分をいふ。其の底には纏狀部の端開く、これを**輸卵管腹口**といふ、漏斗の先きには多數の總

の如きものあり。これを**剪綵**といふ。

(四)構造　(1)外膜　(2)筋質　(3)粘膜より成る。この粘膜の内面には極めて細き無數の『顫毛』を生じ、常に子宮の方に向ひて動き、卵巢より輸卵管に入り來れる卵を子宮腔に向ひて送る作用をなす。

四　卵巢

(一)位置　子宮の兩側、輸卵管の後下方にあり。

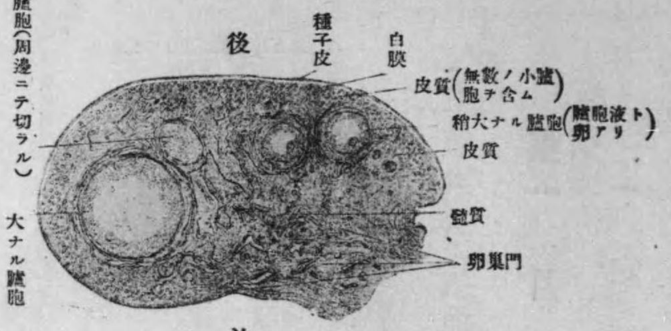
(二)形狀及大さ　扁平の長圓形をなし左右一對あり。大さ桃の種子の如し。

(三)構造　其前緣濶靱帶に對する部は血管神經の出入する處にして、卵巢門より中央迄を**髓質**と云ふ、こゝを**卵巢門**と云ふ、其他を**皮質**と云ふ。

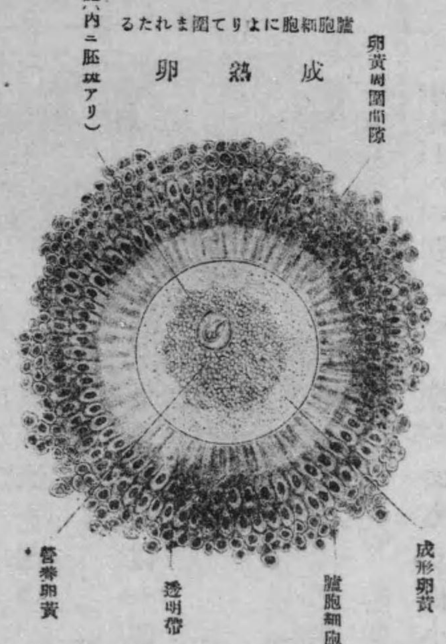
皮質の內には無數の小胞あり、これを**濾胞**と稱す。其の大さ一定せず、小なるは肉眼にて見得ざるも大なるは豌豆大を超ゆ。其成熟したるを**成熟濾胞**（グラーフ氏濾胞）と云ふ。この濾胞內には一個の卵を有し、又濾胞液を含む。

卵　卵は、大なる細胞にして、成熟卵は直徑凡そ〇、二密米なり、卽ち罌粟粒よりも尙小にして、肉眼にて

第六十三圖　卵巢斷片
（顯微鏡ニテ擴大）



第六十四圖



生殖器の生理

第一　月經

一　定義

殆ど視難き一小白粒なり。

卵に、**卵黄**と**胚胞**（卵核）あり、胚胞中には**胚斑**を認む。

月經とは、凡そ四週間毎に反復來潮する子宮體粘膜よりの出血なり。

二　破瓜期と更年期

破瓜期

（一）**月經初潮**……（平均十四歲八ケ月）
　排卵開始

（二）**肉體上の變化**
　全身（腰部、諸關節に脂肪增加）
　生殖器
　　外生殖器（乳房、外陰部）
　　內生殖器（膣、子宮、卵巢等）

（三）**精神上の變化**（性慾の感念）

更年期

（一）**月經閉止**
　排卵停止……（四十五―八歲）

（二）**肉體上の變化**（下腹痛、下痢、皰瘡、發汗、逆上、心悸亢進

（三）**精神上の變化**（不眠、頭痛、眩暈、沈鬱、恐怖觀念）

三　子宮內膜の周期的變化

月經を見る年齢の婦人の子宮內膜は、凡そ四週間內に次の四期の變化を起す。

第十表

0	10	18	28
月經出血期。三―七日間			
月經後期。出血第一日より凡そ十日目迄			
（再生期）			
休息期。出血第一日より數へて、十日―十八日間。			
（間歇期）			
內膜の厚さ三密米（一分）			
月經前腫脹期。次の月經前約十日間。			
內膜の厚さ六密米（二分）			

以上を一周期として、次へ次へと、反復して變化す。

四　月經時身神の變化

(一)肉體的障碍。(1)血行器及消化器の變調、(2)乳房の腫脹又は疼痛、(3)下腹痛、腰痛、薦骨痛等。

(二)精神的障碍。神經過敏、沈鬱又は興奮、思慮及意志薄弱等。

右は人々により其強弱の度を異にす。

第二　排卵機能

卵巢內の濾胞は小兒期に於ては小なるものなるが、破瓜期以後は其の一個づゝが、代る々々々々漸次に發育增大し、其の內の卵も大となり、濾胞液は益々增加し。遂に成熟濾胞と成るに及びて卵巢表面に近き其濾胞液の內壓に堪えずして、濾胞は

破裂し、其裂孔より膿胞液と共に成熟卵が排出せらる、これを**排卵機能**といふ。

この排卵機能は破瓜期より始まり其の以後四週間に一回づゝ起り更年期以後には失はる。

卽ち月經を見る年齡の婦人に於ては、普通月經の數日前に排卵するものにして、妊娠中及產褥中には通常この機能なし。故にこの排卵機能と月經とは密接の關係を有するものなり。然れども時として、月經なき婦人に於ても、排卵機能あり、從つて月經を見ずして妊娠することあり。

第三　受胎（受孕、妊孕）

一　定義

精絲が卵子の內に進入して、或變化を營み、これにより胎兒形成の基原をなす作用をいふ。

二　受胎卵の發育

交接によりて膣內に射出せられたる精子は、子宮頸管を經て子宮體に入り、更に輸卵管を通じて、其漏斗部附近の皺襞の間に潛みて卵の至るをまつ。

婦人月經前腫脹期の頃に排卵せられたる卵が、剪綵によりて捕へられて漏斗部に來る時は、精子と相會合して其の體內に一種特別の變化を營む、卽ち、**受胎作用**を行ふ。

この受胎したる卵子は忽ちに二つに分れ、其の各が更に二つに分れ卽ち四となりて、又其の各が更に二分する爲めに、漸

次に其の細胞の數を增加し、以て遂に胎兒を形成するに至る。受胎卵が其の內部に變化を營み、且つ分裂しつゝ輸卵管內を通じて、子宮體腔內に進み、遂に其體腔の上部（前壁又は後壁）に附着す。茲に於て始めて**妊娠**の成立するものにして、卵はこれより子宮腔內に於て其の發育を遂ぐ。

第五節　血管腺

一　脾臟

左季肋下にあり。大さ手拳の半位。柔軟にして赤褐色を呈す。血液の製造に關係あり。

二　淋巴腺

前に述べたり。機能は白血球の製造及有害物の抑留なり。

三　胸腺

成人には失はる、小兒にては大動脈基部（出發部）と胸骨との間にあり。小兒の發育に關係あり。

四　甲狀腺

氣管の最上部前面にあり、馬蹄狀をなす。

五　副腎

左右腎臟の上端に位す。

第三編　消毒法

第一章　細菌

細菌は、極微の生物にして通常顯微鏡によりてはじめて見得るものなり。

この細菌の中には、人體に無害のものと有害のものとあり。有害にして疾病を起すもの、これを**病原菌**と稱す。病原菌の中主なるものは次の如し。

第一　球菌

一連鎖狀球菌及葡萄狀球菌　以上二つ共に化膿菌にして到る處に多く存在し、この爲めに種々の化膿を起す。又これによりて、産褥熱をも起すものなり。

二丹毒菌　連鎖狀球菌の一種なり。

三淋病雙球菌。

第二　桿菌

一結核桿菌。

二破傷風桿菌。

第三　螺旋菌

「スピロヘーテ、パリーダ」　梅毒の病原菌。

第二章　消毒の必要なる理由

第六十五圖　諸種の細菌

第一、産褥熱豫防の爲に必要なり。

▲細菌殊に化膿菌の如きは殆ど到る處に存在し、而も吾人の肉眼に映じ得ざるを以て、肢體又は各種の物體は是れ悉く細菌を以て充されて居ると見るを至當とす

▲分娩時には生殖器に必ず多少の創傷を免れず。

▲故に妊産褥婦の生殖器に、消毒せざる手指又は各種物體を觸るゝ時は、之等に附着せる病菌は忽ち其創傷より體内に侵入し以て産褥熱を起すに至る可し。

こゝに於てか、妊産褥婦の取扱に際し、手指、外陰部、器械又は繃帶材料等の消毒を要する所以なり。

第二、其他の傳染病豫防の爲に必要なり。

消毒は啻に産褥熱豫防上必要なるのみならず、尙次の如き疾病の豫防にも必要なるを忘るべからず。

第十一表

消毒を忘りたる爲起る疾病

	産婆に直接關係多きもの				其他
	母體		初生兒		諸種の傳染病（獨習書に示せり）
病名	産褥熱 丹毒 破傷風		膿漏眼	丹毒 破傷風	鵞口瘡
病原菌侵入門	生殖器		眼	臍・皮膚の創面	口腔粘膜

第三章　制腐法と防腐法

消毒法とは、肢體又は各種の物體に附着せる細菌を殺滅し、以て無害たらしむる法にして、これに制腐法と防腐法との二あり。

第一節　制腐法

既に細菌の爲め病變の起りし場合に（通常藥品の力により）其細菌を殺滅し、以て其病勢を抑制する法なり。

例へば。生殖器に潰瘍ある時に、こゝを石炭酸其他の消毒液にて清洗するが如き。或は一般化膿創面に「ヨードフオルム」等を撒布するが如きは制腐法なり。

第二節　防腐法

肢體又は各種の物體を無菌の狀態となし、且つ更に細菌の來らざる樣になし、以て疾病を未然に豫防する法なり。

例へば。正規の妊娠分娩、産褥に際し、其外陰部を消毒し或は産婆の手指、器械、繃帶材料等をも消毒し、以て産褥熱を未然に防ぐは防腐法なり。

或は手術部の皮膚及術者の手指の細菌を除き（皮膚の消毒）無菌の器械にて手術し（器械の消毒）手術部を無菌の「ガーゼ」類を以つて被ひ（繃帶材料の消毒）以て化膿を豫防するが如きは防腐法なり。

皮膚は眞に悉く細菌を除き得ざるも、器械及繃帶材料等は熱力等により、全然細菌を殺滅し得るを以つて、其消毒を亦

殺菌又は滅菌ともいふ。

第四章　消毒法の種類

- 一、理學的消毒
  - 熱力
    - 火熱
      - 焼却
      - 熱灼
    - 煮沸熱
    - 蒸氣熱
    - 熱氣
  - 光線（日光）
  - 機械的
- 二、化學的消毒（藥物消毒）

第五章　消毒藥

第一節　消毒藥の種類

産婆の使用する消毒藥の主なるものは次の如し。

一　石炭酸
二　昇汞
三　「リゾール（クレゾール石鹸液）」
四　「リゾフォルム」
五　酒精（アルコール）
六　「ヨードフォルム」。「アイロール」。「デルマトール」の類
七　硝酸銀。「プロタルゴール」
八　硼酸

第二節　消毒藥の用法

一、石炭酸水

石炭酸は白色針狀の結晶なり。これを溫湯にて溫め流動性となしたるものを、湯を以つて稀釋す。

(1) 五％石炭酸水、器械の消毒に用ふ。

(2) 二％石炭酸水、手其の他皮膚の消毒に用ふ。

（腔洗滌等には更に倍に稀めたるものを用ふ）

二、昇汞水

昇汞は白色の結晶にして毒藥なり。同量の食鹽を加へて水に溶解すべし。其の溶液は無色透明無味無臭なるが故に、通常酸「フクシン」、又は「スカレット」等を以て着色す。

(1) ○、二％昇汞水、金屬製ならざる器械類（ゴム製等の器械）の消毒に用ふ。

(2) ○、一％昇汞水、手其他皮膚の消毒に用ふ。

(3) 昇汞錠、携帶に便なり。

昇汞　○、五
食鹽　○、五
小量
「フクシン」

を昇汞錠一個となす。

故に千倍の昇汞水を千瓦作るには昇汞錠二個を要す。

注意

次の場合には昇汞水を用ふべからず。

1. 子宮內洗滌、又は大なる創傷の洗滌。
2. 食器、玩具の消毒又は飲料水に混ずべき處ある處の消毒。
3. 痰、吐物、糞便の消毒。
4. 金屬製器具の消毒。

三、**リゾール水**　リゾール（クレゾール石鹸液）は茶褐色透明の液體にして、隨意の分量に水に溶解す。

(1)　六％リゾール水、器具の消毒に用ふ。

(2)　一％リゾール水、手其他皮膚の消毒に用ふ。

（膣、或は子宮の洗滌には更に倍にうすめ用ふ。）

第六章　消毒の方法

第一節　手指及皮膚の消毒法

(一)　先づ產婆着を着し、肘關節よりも上方までを露し。

(二)　爪端を短かく剪り爪隙間にある不潔物を清潔なる小楊枝又は爪鑢の先にて堀り出し、爪を鑢にて滑かにす可し。

第六十六圖　爪鑢

第一段の方法　然る後次の三段の法に從ひて消毒す可し。

攝氏五〇°度位の**溫湯**と　**石鹸**と　**刷毛**とを用ひて、前膊、手及指を丁寧に洗ふ可し。

溫湯は絶えず流出するものをよしとす。若し、この裝置のなき時には、二個の洗面器を用ふ可し。卽ち一個は石鹸使用時に用ひ、他の一個は石鹸を洗ひ落すに用ふ。（或は土瓶類に溫湯を入れ流出せしむるもよろし。）

石鹸は『加里石鹸』を最上とす。之の性質の佳良なるを選ぶ可し。

刷毛はあまり小なるはよろしからず、毛は成る可く耗きを宜しとす。使用後は一度煮沸して乾燥しおく可し。

以上は**五分間**以上（五―十分間）平等に擦刷し、殊に指間、爪隙其他の凹處に注意すべし。

第二段の方法

「**アルコール**」を殺菌したる「**ガーゼ**」（或は木綿布、或は「フランネル」）に浸して、凡そ**三分間**平等に摩擦す可し。

第三段の方法

前述の**消毒液**即ち通常は〇、一％昇汞水（或は二％石炭酸水或は一、％「リゾール」水）と、殺菌したる**刷毛**とを以つて**三分間**平等に摩擦す可し。

▲以上の方法にては手指を全然無菌たらしめ得ず。故に前記の法にて消毒したる手指の上に、完全に殺菌したる『**莫大小手袋**』を用ふれば更に安全なり。（護謨手袋は最も理想的なれど經濟上の關係にて一般にこれを使用し難し。）

注意

一　産婆は常に不潔物に觸れざる様注意すべし。

(一)種々の傳染病　例へば丹毒、破傷風、實扶垤利亞、發疹窒扶私。右の患者又は其の汚染物。

(二)膿汁を分泌する患者　或は膿汁の附着せる物品。

(三)産褥熱患者　或は其の惡露等の附着せる物品。

(四)屍體　又は屍體より取り出したる內臟等。

以上の如き不潔物に手を觸れたる後は、産婦、褥婦の陰部又は初生兒の臍部等に手を觸る可からず。就中丹毒又は産褥熱患

者を取扱ひたる後は**三日間**は他の産婦褥婦を取扱ふ可からず。其間は休業し、時々手指を消毒し全身浴をなし、其度毎に衣服をも更む可し。

二、産婆は手指に創傷を作らざる様注意す可し。若し極めて小なる傷なりとも存する時は「ゴム」製指袋を用ふ可し。（稍大なる傷ありて膿を出す時は、産褥婦を取扱ふ可からず。）

三、一度消毒したる手（又は他の物品）も、次の場合には消毒の効力を失ふ。

(1) **消毒せざる物品**又は**肢體**に觸れたる時。

(2) **消毒後手を乾燥せしめたる時。**（故に手は時々消毒液にて潤す可し）

第二節　外陰部の消毒

第一段の方法

溫湯、石鹼、綿紗（又は脫脂綿）を以て、皮膚及粘膜を丁寧に洗ひ、溫湯にて石鹼を十分洗ひ流すべし。溫湯は浣水器に容れ、これを外陰部に注ぎ、臀部の下には受器を置くべし。

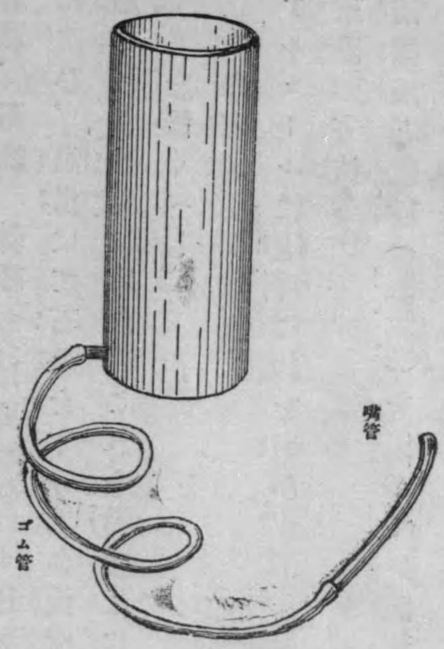
（第二段の方法

アルコールは通常これを用ひず。）

第三段の方法

消毒液と**綿紗**（脫脂綿）を以つて外陰部を洗ふ可し、この消

第六十七圖　洗水器



第三節　器械の消毒法

一、煮沸消毒法

通常**シンメルブッシュ氏煮沸消毒器**を用ふ。其釜に湯を入れ、其の中に凡そ**一%の割合に重炭酸曹達**(或は炭酸曹達)を加へ熱す可し。

これは鐵製の器械に錆を生ぜしめざる爲め及消毒の効力を強からしむる爲め加ふるなり。

煮沸の時間は沸騰後**五―十分間**、(双物類は凡そ五分間)とす。

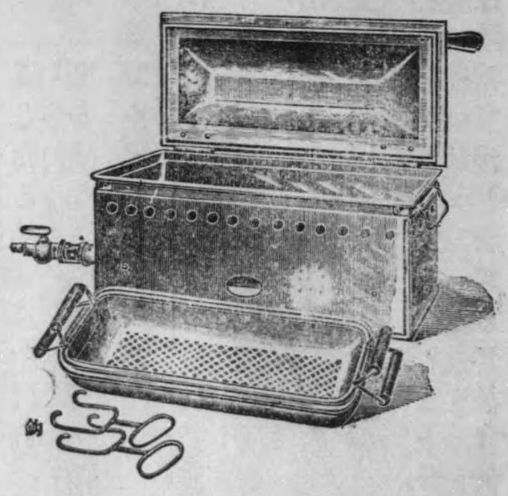
注意(1)　凡て器械は湯中に全部浸しあるを要す。

(2)　硝子製器械は水より煮沸するか或は一度び微温湯に毒液も浣水器に容れたるものを用ふ。

注意　すべて外陰部の内面又は皺襞の間を注意して清むべし。

第六十八圖

シンメルブッシュ氏煮沸消毒器



て溫めたる後に熱湯中に入る可し。双物類は「ガーゼ」にて双を包みたる後靜かに入るべし。

(3) 煮沸消毒の後に直ちにこれを使用する時は、單に消毒したる消毒皿中に列べ。若し消毒後使用までに時間を要する時は、薄き消毒液中に器械の全部を浸しおくべし。

(4) シンメルブッシュ氏煮沸消毒器のなき時は、通常の釜、鍋、鐵葉製の罐等を代用するを得。

二、消毒液による方法

五〇〇倍昇汞水(金屬製器械を除く)、五%石炭酸水等の中に器械の全部を浸し、少なくも**三十分間以上**浸しおく可し。これは通常煮沸し得ざる器械　例へばゴム類、に用ふ。

この方法もはじめに、溫湯と石鹸と刷毛とを以つてよく洗ひたる後になす可し。

注意　**器械使用後は**　一度よく洗ひ煮沸消毒を行ひ、其の熱の冷えざる中にこれを拭ひて乾燥し、鐵製のものは渡金の有無に拘らず「オリーフ」油又は「ワゼリン」等を塗りおく可し。

第四節　繃帶材料の消毒法

(繃帶材料とは綿、脫脂綿、綿紗、布、結紮絲等なり。)

一　煮沸消毒法

濕りたるまゝ用ふるものは煮沸するを便とす、時間は**五分**―**十分間**。

これも亦消毒後使用までに時間ある時は、薄き消毒液中に浸しおく可し。煮沸後直ちに用ふる時は、殺菌水、或は消毒液にて冷すべし。

二、蒸氣消毒法

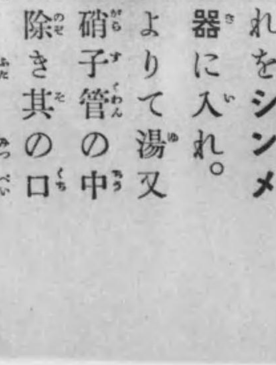
第六十九圖
シメンルプッシュ氏蒸氣消毒器

乾燥のまゝ用ふ可き品はこの方法に從ふ。

先づ**消毒罐**(一名繃帶材料容器、或は繃帶材料貯槽)の側面及底面の窓孔を聞きて、罐の內部に稍大なる一枚の布を敷き、其內部に適當の大さに切りたる綿、「ガーゼ」の類を輕く詰め、先の布片を以つてこれを包み、更に罐の蓋を閉し、窓孔は聞きたるまゝこれを**シンメルプッシュ氏蒸氣消毒器**に入れ。

其の釜の中には漏斗によりて湯又は水を釜の側方にある硝子管の中央迄入れ、漏斗を取り除き其の口を螺旋にて密閉し、釜の蓋も密閉し、蓋の中央に寒暖計を挿し込み、釜の下より瓦斯、木炭火等を以つて熱を加ふ可し。この熱の爲めに內部の湯の沸騰する時は、湯より蒸氣を發生し、其の蒸氣は釜の內面上部の孔よ

第七十圖
繃帶材料容器



第七十一圖

シンメルブッシュ氏蒸氣消毒器

（斷面圖）

管により槽中の水に導かる。

この時間は、蒸氣が攝氏百度に昇りて後三十分乃至四十五分間を要す。

此終りたる時は、第一水槽に連る鉛管を去り、第二火熱を去り凡そ五分間冷却して後、第三釜の蓋を開き、消毒罐の窓孔より釜の中に出で、消毒罐の窓孔より入り、其内部の繃帶材料を通過し、再び消毒罐より出で、釜の底の管を通じて釜の外に出で鉛

に觸れざる樣に注意してこれを取り出し、すみやかに其窓孔を閉す可し。

其の材料を使用するには其度毎に罐の蓋を開きて取り出すものなれども、一度開きたる時は其の材料は當座の使用に供し、殘餘は他日の使用に供することなく、不足分を補足し更に再び消毒す可し。

三、藥品消毒

繃帶材料を石炭酸水、昇汞水、「リゾール」水等に浸して用ふることあり。

又昇汞水、「サルチル」酸液、硼酸水等に浸して乾燥したるものを販賣するものあれども、完全に無菌と云ひ難し。

第五節　衣類の消毒法

產婆着、產婦の衣類、敷布其他の布類は、蒸氣消毒を行へば完全なれども通常實行し難きを以て、一度煮沸したる後日光にて乾燥し尙火熨斗をかくれば比較的安全なりとす。

或は、**曹達水、石鹼汁**、又は**木灰汁**中に二時間以上浸し、或は熱湯に漬けて後石鹼を用ひて洗ふ可し。

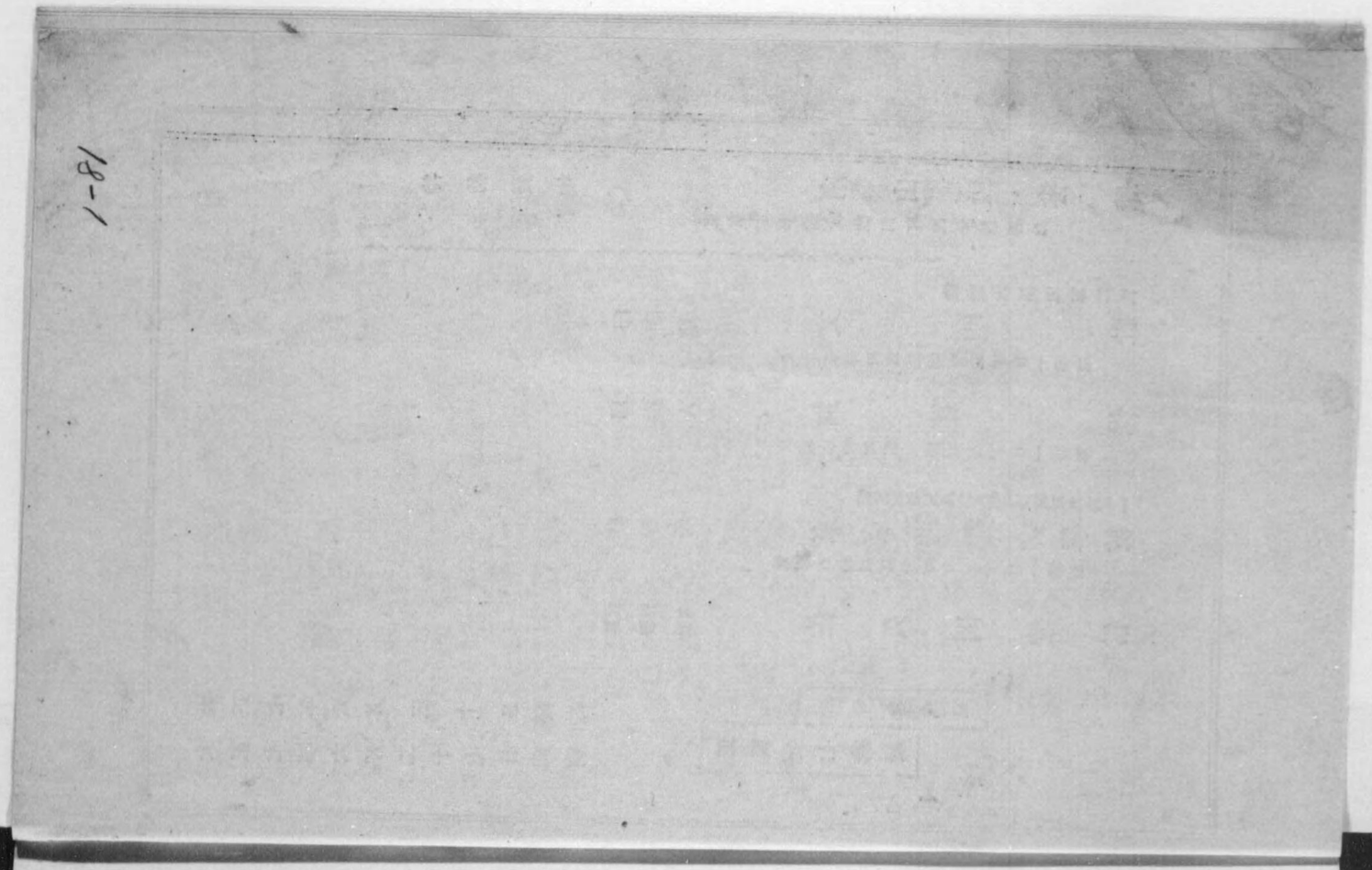
注意　以上の法にて消毒したる衣類は(假令蒸氣消毒をしたるものにても)消毒せざる手にて取扱ひ又は普通の場所に貯へたる時は只比較的清潔と云ふに過ぎざるを以て、之を消毒したる手指、外陰部、繃帶材料等に觸れざる樣注意すべし。

大正七年六月二十七日印刷
大正七年六月三十日發行

正價金七拾錢
送料金八錢

著作兼發行者　佐久間兼信　東京市神田區三崎町三丁目一番地
發行所　東京助醫女學校　電話本局五八二・振替東京三九九一一　東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷人　加藤保　東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　文明社　電話本局三三二六　東京市神田區三崎町三丁目一番地

特約賣捌
南山堂書肆　東京市本郷區龍岡町三十四番地　電話下谷四一七八・振替東京六三三八



終